

研究所報

No. 87

2026. 3. 1.

目次

「樹立の精神」100年	1
2025年度「特定・指定研究」資料室「研究組織一覧	2
2025年度「指定研究」等研究目的紹介	4
2025年度「一般研究」等研究組織一覧	12
2025年度「一般研究」(新規採択課題)研究目的紹介	15
2025年度東京分室PD研究員個人研究 研究目的紹介	22
公開研究会・講演会報告	23
海外研究調査報告	26
国内研究調査報告	33
歎異抄ワークショップ開催報告	39
大阪・関西万博インド館展示への仏教写本研究の協力等について	41
彙報	43

「樹立の精神」100年

大谷大学長 一楽 真

今年には第三代学長の佐々木月樵先生が「大谷大学樹立の精神」を宣揚されてから100周年であった。この年を迎えるに当たり、2年前から真宗総合研究所の特定研究として研究班を立ち上げ、本学樹立の精神を改めて確かめる場を設けてきた。

51歳で示寂された佐々木先生が遺された五百数十編を数える論文や著作について、簡単に述べることもできず、若い頃からの文章にも、すでに人が育つことについての熱い願いがほとばしり出ている。

釈尊と仏弟子の問題、仏弟子の在り方、経論をめぐる考察等々。その論考には教えを聞くとはどのようなことなのか、教えに会うところにどんな生き方が始まるのかという、仏教徒の生き方を問う課題が流れている。もちろん師である清沢満之との出会いがその問いを生んだことは言うまでもない。浩浩洞は毎日議論が絶えることがなかったと言われる。そこでの共同生活を通して問いが深められていったことは想像に難くない。

もう一つ、仏教徒という時、三河生まれの佐々木にとっては、廃仏毀釈の中での大浜事件が大きいと思われる（一般に「大浜騒動」と呼ばれることが多いが、それは体制側からの呼称と言わねばならない。この事件をどう受けとめるかも含め、呼称については一考の必要がある）。今、事件の内容について述べることは控えるが、事件に関わったとして2人が斬首されている。これは法然上人のただ念仏の教えが国から断罪され、4人が死罪、8人が流罪になったことを想起させる。

「樹立の精神」には闍梨院空覚の殉教のことが述べられているが、教えに生きる者が殉教したという問題についても、若い頃の論考がすでに見られる。その根には常に実践の課題があった。佐々木の『実験の宗教』は単著としても有名である。この実験ということも清沢先生との出会いの産物と言って良いが、樹立の精神に結実する課題が、早くから一貫していることに

注意をしておく必要がある。

「樹立の精神」には仏教の公開についての願いが熱く語られている。それは仏教が寺院や宗派の中に閉じ込められており、現に苦悩を抱えた人間に応答できていないという現状があったからである。学校における教育を通じて、仏教を世間に開いていくこと、それが「仏教の解放」として語られている。そして人を得ることがその実際であるとして「人格の陶冶」が謳われている。有名な「本務遂行、相互敬愛、人格純真」の三モットーは、本学の人格陶冶の三条として述べられているものである。

「樹立の精神」が生み出されるしばらく前、佐々木は沢柳政太郎を団長とする文部省の欧米視察団に同行している。海外の大学を視察する中で、日本の大学にはない「宗教的気分」が共通していることを見たと言う。どの大学も礼拝堂と寄宿舎をもっている。それらが人が育っていく元になっていることを見てきたのである。もちろん、これは施設の問題ではない。宗教が開放されている事実を見たのである。それを承けて仏教の学びが真に学として「解放」されることを佐々木は強く願うことになる。

大学令による大学として「大谷大学」が認可されたのは1922（大正11）年のことである。大学名から「真宗」は消えたが、かえって本学の仏教の学びを「真宗学」として示すことになった。人間にとっての「真宗」を明らかにする学びであることを打ち出したと言える。その学びが「学として学界に解放し国民一般に普及する」という願いに立って学制として整えられていく。

佐々木が宗派や大学の枠を超えて構想した大学は、西田幾多郎を講師として招き、さらに西田の助力を得て鈴木大拙を招聘する。大谷大学を世界の仏教研究の中心としていくことへの願いが表れたものであった。

樹立の精神100年を迎え、本学の存立意義と人物育成の理念を改めて肝に銘じたい。

2025（令和7）年度「特定・指定研究」「資料室」研究組織一覧

【特定研究】

研究名	研究課題及び研究組織	
「大谷大学樹立の精神」100年 【2023～2024年度】 ※一年延長(2025年度まで) 研究代表者 一 楽 真 (学長)	研究課題	佐々木月樵が「大谷大学樹立の精神」に込めた願いとその背景を尋ねる
	研究員	○戸 次 顕 彰 (准教授・仏教学) 大 艸 啓 (講師・日本古代史)
	嘱託研究員	西 本 祐 攝 (本学准教授・真宗学)
	研究補助員(RA)	巖 城 大 空 (博士後期課程第2学年)

【指定研究】

研究名	研究課題及び研究組織	
国際仏教研究 【2023～2025年度】 研究代表者 木 越 康	研究課題	国際的な仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開
	研究員	木 越 康 (教授・真宗学・宗教学) Ama Michihiro (教授・アメリカ宗教・文化／国際日本学) Dash Shobha Rani (教授・仏教学) 新 田 智 通 (教授・仏教学) ○Michael J. Conway (准教授・真宗学)
	嘱託研究員	Mark L. Blum (カリフォルニア大学バークレー校教授) Wayne S. Yokoyama (元花園大学講師) 羽 田 信 生 (毎田周一センター所長) 矢 崎 早 枝 子 (グラスゴー大学教授) 山 名 大 河 (博士後期課程第1学年)
東アジア・北アジア仏教研究 【2023～2025年度】 研究代表者 松 川 節	研究課題	仏教を基軸とする東アジア・北アジア学術研究ネットワークの構築
	研究員	松 川 節 (教授・人文情報学・東洋史学) ○井 黒 忍 (教授・東洋史学) 松 浦 典 弘 (教授・東洋史学)
	嘱託研究員	箕 浦 暁 雄 (本学教授・仏教学) 宗 周 太 郎 (本学任期制助教・東洋史学) A. ボルマー (神戸市立外国語大学非常勤講師・研究員) N. アムガラン (モンゴル国ガンダン寺院学術文化研究所研究員)
大学史研究 【2025年度】 研究代表者 采 罌 晃	研究課題	大学史関係資料の収集・整理・管理・保管・研究および清沢満之研究
	研究員	采 罌 晃 (教授・仏教学) 東 舘 紹 見 (教授・歴史学) 西 尾 浩 二 (准教授・哲学) ○松 金 直 美 (講師・真宗学／真宗史)
	嘱託研究員	西 本 祐 攝 (本学准教授・真宗学) 藤 井 了 興 (本学任期制助教・真宗学) 名 畑 直 日 兎 (元真宗大谷派教学研究員)

仏教写本研究 【2025～2027年度】 研究代表者 Dash Shobha Rani	研究課題 仏教写本の総合的研究 研究員 Dash Shobha Rani (教授・仏教学) 新田 智 通 (教授・仏教学) ○戸 次 顕 彰 (准教授・仏教学) 嘱託研究員 Suchada Srisetthaworakul (マヒドン大学講師・古典写本研究センター・センター長〈タイ・アユタヤ〉) Anand Mishra (ハイデルベルク大学 Assistant Professor) David Wharton (シンガポール工科デザイン大学研究員) 柏 原 信 行 (公益財団法人国際仏教文化協会理事)
チベット文献研究 【2023～2025年度】 研究代表者 三 宅 伸一郎	研究課題 大谷大学所蔵チベット語文献の研究 研究員 ○三 宅 伸一郎 (教授・チベット学) 嘱託研究員 上 野 牧 生 (本学准教授・仏教学) 伴 真一郎 (2024年度チベット文献研究嘱託研究員)
宗教・社会研究 【2025年度】 研究代表者 後 藤 晴 子	研究課題 宗教と社会の関係をめぐる総合的研究 —社会的なものとしての宗教— 研究員 後 藤 晴 子 (東京分室長・准教授・社会学) PD研究員 鶴 留 正 智 (PD研究員・真宗学) 高 橋 泉 (PD研究員・教育学) 藤 井 麻 央 (PD研究員・宗教学) 繆 寿 楽 (PD研究員・インド哲学・仏教学)

【資料室】

名 称	研究課題及び研究組織
デジタル・アーカイブ 資料室 【2025年度】	研究課題 大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブの構築 室 長 箕 浦 暁 雄 (研究所主事・教授・仏教学) 嘱託研究員 川 端 泰 幸 (博物館主事・本学准教授・日本中世史)

○…庶務担当

2025（令和7）年度「指定研究」等研究目的紹介

特定研究「大谷大学樹立の精神」100年

佐々木月樵が「大谷大学樹立の精神」に込めた願いとその背景を尋ねる

研究代表者・教授 一楽 真
(真宗学)

大正時代、1918（大正7）年に「大学令」が出され、帝国大学以外の公立・私立の大学が認められることとなった。大谷大学は1922（大正11）年に大学令による大学として認可されているから、いち早く認可を受けた大学の一つである。そして、校名も「真宗大谷大学」から「大谷大学」へと改めた。その大谷大学が誕生した2年後の1924年に第3代学長に就任した佐々木月樵は、翌1925年の入学宣誓式において、「大谷大学樹立の精神」という講演を行い、大学令に基づく大谷大学としての使命を述べる。この言葉は初代学長清沢満之の「真宗大学開校の辞」と併せて、本学の建学の精神を表明したものと位置づけられ、現在に至るまで重視されている。

2025年は、「大谷大学樹立の精神」が発表されてからちょうど100年の節目となる。100周年を迎えるにあたり、「大谷大学樹立の精神」に込められた佐々木月樵の願いをあらためて確かめていくことが本研究班の大きな目的である。

この目的を達成するためには、まず佐々木の生涯や著述活動の全体像を把握することが必須となる。佐々木の著作に関しては、すでに『佐々木月樵全集』（全6巻）にまとめられているが、そこに収録されているものは著作などのごく一部であり、論文やエッセイ等の収録されていないものが多く残されている。

本研究班では、『佐々木月樵全集』に収められていない著作について、それらを収集してデータ化し、その一つひとつについて校正・読解・検討する作業から始めている。幸いなことには、すでに2006年度「大学史研究班」によって佐々木に関する文献はかなり収集されており、そのリストも残されている（そのリストによれば、592点の論文・エッセイなどが確認できる）。本研究班においては、まず「大学史研究班」によって作成されたリストをあらためて精査・整理し、収集されていない文献についてはそれらを収集、すでに収集されている文献についてはデータ化して校正

していく作業をおこなっている。なお、文字起こしとデータ化については2025年度でほぼ完了することが予想されるので、今後は校正が完了したものを順次何らかの手段によって共有していくことも検討していきたい。

現在は佐々木の著述について、雑誌等での初出の原稿と、その後それらのいくつかが集成されて一冊の著作となり、さらに佐々木の没後に全集として刊行されていくその過程についての調査にも着手している。それら初出と著作と全集との関連関係を見ていくことによって、佐々木の加筆・修正の足跡の有無をたどることが課題となっている。

本研究班はこうした諸作業を経て、佐々木の生涯にわたる著述活動およびその内容の全体像の把握を目指す。そのうえで、特に「樹立の精神」に関する文献や、欧米視察に関する文献について、特に注意深く検討を進めていきたい。「樹立の精神」に関する文献は、それらに注目することによって「樹立の精神」が発表された背景を明らかにすることにつながると考えられる。

また、2025年度は先にも述べたように「大谷大学樹立の精神」発表から100年の節目であるから、外部の有識者を交えた議論、あるいは研究発表の場を設けることも企画している。具体的には、本学の開学記念式典が挙行される10月11日の午後に開催することを計画しており、佐々木の著述や業績に関する研究成果を有する研究者を招聘して提題と意見交換をおこなう予定である。特に大谷大学名誉教授で現在真宗大谷派教学研究部所長の織田顕祐氏、真宗大谷派親鸞仏教センター嘱託研究員の伊藤真氏の招聘を予定している。両氏は異なる経歴ではあるが、いずれも仏教学の中の華厳教学を専門とし、佐々木に関する研究実績も有する。両氏の招聘によって「樹立の精神」の背景にある仏教者としての佐々木の実像の解明に迫りたいと考えている。

最終的には、佐々木月樵の小伝、および「樹立の精神」を学生や教職員が学ぶための副読本の作成を目指したいが、本研究期間内では、そうした刊行物作成の基盤をまずは整備することが主な目的となる。この研究期間終了後も、教員や大学院生が中心となり、佐々木月樵研究を継続していける体制を整えていくことが研究期間内における本研究班の使命であると考えている。

国際仏教研究

国際的な仏教研究の動向の 把握と資料の収集・整理・公開

研究代表者・教授 木越 康
(真宗学)

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。

仏教学・宗教学の分野における国際化は COVID-19 による大きな影響を受けた後もインターネットを活用しながら一層進んでおり、真宗学についても英語などの国際語による研究を視野に入れて研究成果を公開していかなければならない状況にある。そうした動向に対応すべく、海外の学術交流協定校などの研究機関および真宗大谷派北米開教区 Shinshu Center of America と協力して研究活動を進めていく。

本年度は具体的に以下のようなテーマで研究活動を行う。

活動内容

① 国際学会・ワークショップへの研究員の派遣

a) 『歎異抄』翻訳研究ワークショップ (2025 年 6 月に本学で、2026 年 3 月に米国カリフォルニア州バークレーで開催予定) に研究員と公募で選ばれた大学院生を派遣する。この国際ワークショップは、カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所・龍谷大学世界仏教文化研究センターと本研究所の学術交流協定に基づいて継続的に開催されている。

b) 世界宗教学・宗教史学会の大会は 2025 年 8 月 24 日 (日) から 30 日 (土) にかけてポーランドのクラコフ市にて開催される。1 名の研究員を派遣し、個人発表を行う予定である。

c) 国際真宗学会のヨーロッパ大会は 2025 年 9 月 1 日 (月) から 3 日 (水) までイギリスのオックスフォード市にて開催される。2 名の研究員を派遣し、個人発表を行う予定である。

② 国際シンポジウムの成果出版

2023 年 12 月 15 日 (金) から 17 日 (日) の 3 日間、本学を会場に ELTE 東アジア研究所との共催で国際シンポジウム “Enlightenment, Wisdom, and Transformation in the World’s Religious Traditions” (世界の宗教伝統におけるさとりと知恵と変容) を開催した。本年度は、その成果出版に向けて準備を進める。成果出版の形態を決定した上、シンポジウムの参加者に具

体的に執筆内容について依頼する予定である。

③ 「女性と仏教」に関する国際的研究の継続

「女性と仏教」をテーマとする国際的な研究者との関係を開拓し、2019 年度のワークショップに続くさらなるワークショップの開催に向けて準備を整える。「女性と仏教」をテーマとする研究データベースを作成し、公開の形態について検討する。

④ Shinshu Center of America の英訳事業への協力

真宗大谷派北米開教区の Shinshu Center of America から出版される浄土真宗、特に大谷派関係の書籍の英文翻訳への協力。特に金子大榮師の『浄土の観念』の英訳を出版するために、校正作業を進め、Shinshu Center of America の編集担当者と編集作業をする。

以上

東アジア・北アジア仏教研究

仏教を基軸とする東アジア・北アジア学術研究ネットワークの構築

研究代表者・教授 松川 節
(モンゴル史、モンゴル仏教文化史)

本研究の意義と目的

国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を発信していくために、アジアにおける仏教研究の動向を把握するとともに、東アジア・北アジアにおいて本学が学術協定を締結している諸機関との共同研究ネットワークを強化し、本学が研究のハブとなってアジア仏教の研究を推進することを目的とする。

目標と期待される成果

①東アジア・北アジアにおける仏教研究の動向把握

本学が学術協定を締結してきた実績を有する中国社会科学院古代史研究所、モンゴル国立大学を中心に、学術交流を通して最新の仏教研究動向の調査研究を行う。具体的には、Ⅰ) 新型コロナ禍によって中断していた中国社会科学院古代史研究所との学術交流を復活させ、「中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化の研究」をテーマに双方の研究者が往来し共同研究を実施する。Ⅱ) モンゴル国立大学との共同研究「モンゴル仏教の起源に関する仏教学・歴史学・考古学的研究」を、双方の研究者が往来して共同で実施する。Ⅲ) 共同研究ネットワークを強化するために、モンゴル国ガンダン寺学術文化研究所との共同研究「ガンダン寺所蔵文献と本学図書館所蔵文献の比較研究」を行う。

②本学が研究のハブとなってアジア仏教の研究を推進するために、東アジア・北アジア仏教史全般に関わる「釈迦如来梅檀瑞像」の伝播をテーマとして日本・中国・モンゴル国・ブリヤート共和国の研究者が共同研究を行い、2025年度に本学で国際シンポジウム「東アジア・北アジアにおける「釈迦如来梅檀瑞像」伝播の諸相の解明と東アジア・北アジア学術研究ネットワーク構築」を開催して成果を公開する。

③研究体制変更に伴い、前研究体制での研究項目Ⅰ)「中国古代史及び敦煌・トゥルファン文書研究」国際シンポジウム(2015年12月開催)の成果論文集の出版を実施する。

研究計画

2025年度

①中国社会科学院古代史研究所と本学との研究者往来による共同研究の実施を継続し、2026年3月に松浦典弘研究員・宗周太郎嘱託研究員は北京に出張し、中国社会科学院古代史研究所との学術交流・共同研究を行う。

②国際シンポジウム「東アジア・北アジアにおける「釈迦如来梅檀瑞像」伝播の諸相の解明と東アジア・北アジア学術研究ネットワーク構築」を開催する。国外(ロシア連邦、モンゴル国、中華人民共和国)から計4名、国内(龍谷大学、京都府立大学)から計2名の登壇者を招聘し、2025年11月30日に本学にて開催する。シンポジウムの成果を論文集として当該年度中に刊行する。

③「中国古代史及び敦煌・トゥルファン文書研究」国際シンポジウム(2015年12月開催)の成果論文集の出版を実施する。

大学史研究

大学史関係資料の収集・整理・管理・保管・研究および清沢満之研究

研究代表者・教授 采罌 晃
(仏教学)

本研究班は、2024 年度からは大谷大学に関わる資料の収集・整理・保存に取り組むことに加え、近年指定研究として取り組まれてきた清沢満之研究を大学史研究の中に位置づけ、これまでの清沢満之研究をひきついで取り組んでいる。以下、【大学史研究関係史資料】と【清沢満之研究】とに分けて記す。

【大学史研究関係史資料】

今年度の大谷大学史研究関係史資料の活動について、近年検討すべき点として大学の重要な史資料が電子データ化されてきており、そのような史資料をどのように収集・管理・保存するかという課題が存在している。大学史研究とは、本学がどのような大学なのかを確かめるための基礎研究であるが、そのための基礎作業として、大学にかかわる史資料を確実に収集・整理・管理・保存することは必須な取り組みである。

そのため、2025 年度においては、既述のような史資料の変化をふまえて、本学に関わる史資料の収集・整理・管理・保管について、まずはその方法の明確化を目指して、調査研究に取り組んでいる。

また、必要に応じて、大学史に関わる研究内容を有する特定研究「大谷大学樹立の精神」100 年」と連携する。

具体的な取り組みとしては、以下 6 項目となる。

1. 未整理の大学史資料を整理、保存する。
2. 大学史に関わる資料の収集・管理・保管体制のルール、方法の検討を行う。
3. 2 の目標を実現するため、他大学における史資料の取り扱いについての情報収集を行う。
4. 全国大学史資料協議会への参加をはじめ、他大学の大学史に関係する組織と交流し情報交換する。
5. 整理した大学史資料を図書館などで公開する。
6. 必要に応じて特定研究「大谷大学樹立の精神」100 年」と連携し、第三代学長佐々木月樵関連の資料の整理、収集、分析、公開の支援を行う。

【清沢満之研究】

本研究では、西方寺所蔵清沢満之自筆文献（以下、西方寺所蔵文献と略）の影印（36 枚撮りフィルム 248

本分、総コマ数 8500 枚超）を所蔵しているが、『全集』及び、『全集』別巻、その他で公開済の文献はその 3 分の 1 程である。これは主に『全集』が清沢満之自身の著述を収録し、清沢満之の受講ノートや書籍からの抜書、索引等は収録しないという方針で編纂されたことによる。

本研究では、『全集』に掲載されていない西方寺所蔵文献の翻刻・校正を継続的に行っており、2016 年度終了時には全文献の翻刻を済ませ、一次校正に進んでいる。2018 年度～2020 年度は『全集』別巻の刊行に専注したため、西方寺所蔵文献の校正を中断したが、2021 年度～2023 年度には校正を再開し内容精査を行った。2024 年度には、校正と内容精査を進めるとともに、2021 年度から作成してきた所蔵目録を完成させ、公開した。これら未公開文献の研究は、清沢満之の生涯と思想の研究に大きく資するものである。

上記の通り、本研究は、清沢満之の生涯と思想の研究を進める上で、重要な意義を持つ西方寺所蔵文献についての研究とその公開に向けた研究を進めている。

具体的には、次の 2 点を柱に研究活動を行っていく。

1. 西方寺所蔵文献（未公開分）の研究
2. 西方寺所蔵文献（未公開分）の公開に向けた研究

西方寺所蔵文献の未公開分は、分量にして 36 枚撮りフィルム 167 本分、総文字数 3,703,420 字である。その中には、清沢満之の生涯全般にわたる文献を確認することができる。2021 年度から 2023 年度までに、その全体について分野、内容、執筆年代等の基礎的な確認・検討を行い、その全貌を精査する研究を進めた。2023 年度までに目標としていた全文献の確認を終え、2024 年度には所蔵目録を完成させて冊子として公開した。2025 年度は当該目録に基づいた資料選定と校正および内容精査の作業を進めるが、これらはあくまで基礎的研究であり、公開へ向けてはその確度を挙げていく研究が必要となる。その研究を踏まえた上で、公開可能な文献は順次、研究所の機関誌等で公開していくことを目標とする。これらの研究で明らかにした成果については、これまで同様に西方寺と情報共有を行う。また、清沢満之の著述について、未収集文献を調査・収集する活動も継続していく。

仏教写本研究

仏教写本の総合的研究

研究代表者・教授 Dash Shobha Rani
(仏教学)

大谷大学には、パーリ語、サンスクリット語等で書かれた仏教に関する写本が数多く所蔵されている。その一部はある程度整理され、研究されているが、未整理で研究されていないものも多く残っている。

本研究は、主に三つの柱を立てて研究を行う。一つ目は、1995年に本学図書館によって出版された『大谷大学図書館所蔵 貝葉写本目録』（以下、『目録』）に登録されているパーリ語貝葉写本を取り上げ、そのデータベース構築、保存、整理、公開など学術研究の準備を整える他、ローマ字転写テキスト・校訂本テキスト・翻訳テキストの作成を通して学術的な利便性を図ることを目的とする。

二つ目は、写本とは単なる文字の集合体ではなく、それが作成や書写された地域・文化の様々な様相も含まれていることから、写本の「総合的な研究」が求められる点である。本研究では、こうした認識に基づき、文献研究にとどまらず写本研究を中心として、南アジア・東南アジアを主な対象に、文字・言語・文化・信仰などに関する国際的・学際的研究を行うことを目的とする。加えて、仏教写本の特徴や性格をより明白に示すために、その他の対象写本と比較検討する。

三つ目は、写本研究を最新の情報に基づき行うため、関連資料の収集、共同研究の実施および研究者・研究機関とのネットワーク構築を目指す。研究者のネットワークを築くとともに本研究の視野を広げる目的で、海外の研究機関との学術交流を図り、それら研究機関の所蔵資料をも活用し、人材の協力を得る。写本や関連文献の研究を踏まえ、諸国における仏教文化や仏教の現状について研究することが可能になり、多角的な視点から仏教の受容性や現代におけるその意義を明らかにする。学術交流の一環として、交流先の研究者と本班の人材を生かして、共同研究・国際シンポジウムなどを開催し、その成果を出版物として公刊する。

研究活動及び成果の国際的な評価を目的として、本研究班の活動を海外の研究機関に向けて紹介し、成果発表会を定期的に行い、英語での出版を目指す。そして、本研究は写本中心ではあるが、仏教思想、仏教文化という拡大した領域に亘って研究を行うため、研究者のみならず、一般の社会人も対象にして公開発表会を定期的に行い、成果の一部を社会に還元する予定で

ある。

この目的を達成するために、2022年度から継続して2025年度において以下の研究活動を予定している。

(1) **写本のデジタル化・整理**：貝葉写本の多角的な研究に役立つよう、本学所蔵貝葉写本の高度なデジタル化の補助およびデジタル化された資料の保存と整理を行う。

(2) **ローマ字転写テキストの作成**：デジタル化され、整理された写本のローマ字転写テキスト作成の作業を順次行う。

(3) **『目録』のデータベース構築・更新**：『目録』の英語版データベースの公開準備とともに、新情報に基づきその更新を継続的に行う。

(4) **ハイデルベルク大学との共同研究**：写本研究の総合的で新たな研究及び技術・知見の集積を目的として、ドイツのハイデルベルク大学の Department of Cultural and Religious History of South Asia と「Manuscriptology and Digital Humanities」（写本研究とデジタル人文学）という共同研究会のもと、国際ワークショップや研究発表会などを定期的に開催する。詳細は以下の URL から確認できる。

- <https://www.sai.uni-heidelberg.de/en/departments-and-branches/cultural-and-religious-history-of-south-asia-classical-indology/manuscriptology-and-digital-humanities> (ハイデルベルク大学)
- <https://www.otani.ac.jp/cri/cmnmkm0000007krj.html> (大谷大学)

(5) **ネットワーク構築・活用**：本学が学術協定を締結しており、現在も宗教文化の一部として多くの写本を所蔵するタイおよびインドの協力機関を中心に、アカデミックネットワークを強化し、研究班の目的達成に向けた学術交流および共同研究を推進する。さらに、2025年大阪・関西万博のインド館「バラタ」における貝葉写本展示への協力を通じて、研究成果を国際的・社会的に発信する。

(6) **資料収集・研究調査**：写本研究に関する資料を国内外の研究機関・所蔵機関より収集し、研究の準備を整える。加えて、インドの東北地方の仏教寺院の未公開仏教写本を調査する予定である。

チベット文献研究

大谷大学所蔵チベット語文献の研究

研究代表者・教授 三宅 伸一郎
(チベット学)

大谷大学は北京版チベット大蔵経や貴重な蔵外文献などをはじめとする多数のチベット語文献を所蔵している。これらは、本学はもとより国内外のチベット研究のための重要な資料となっている。本研究は、これら本学所蔵の重要な文献資料を、専門の研究者が十分に活用できるような形で研究し、重要・貴重と思われるものについては公開することを目的としている。また、海外の研究機関との交流を通じ、それら研究機関に所蔵されている貴重なチベット語の各写本・経典類や学術資源等の調査研究に取り組み、本学所蔵の各種資料との比較研究のための研究資源を形成することを目指す。

上記目的を達成するために、以下のチベット語文献の研究と公開を行う。

- (1) 蔵外 no. 12767 : 『聖大集目連菩薩救母経 (‘Phags pa ‘dus pa chen po byang chub sems dpa’ mo’u ‘gal gyi bus ma la phan btags pa’i mdo)』(写本・127葉)の研究

本経は、目連が地獄に堕ちた母を救う、いわゆる「目連救母説話」を内容とするものである。「経」と題され、翻訳者の名前も奥書に記載されていることから、サンスクリット語からの翻訳仏典を主張している。しかしながら、そこに記されている二人の翻訳者の時代がわずかに異なる点や、第1章から第4章までの内容が『宝星陀羅尼経』の冒頭部と一致することなどから、明らかにチベットで選述された「擬経」であると考えられる。「目連救母説話」は、中国で成立したものであり、その意味で本経は、中国仏教とチベット仏教の交流を考える上で重要な資料である。同内容のテキストの所蔵は、国外の研究機関にごくわずかに見られ、しかも、公開はされていない。この貴重な文献の公開を目指し、2025年度は、全28章のうち第1章から第4章までは『宝星陀羅尼経』との異同を示し、それ以降の部分については明らかな誤りを訂正・注記した校訂テキストに原本の影印を付したものを、この間の研究成果として刊行する。

- (2) 蔵外 no. 11841 『ブトン仏教史』の翻訳研究

本文献は、14世紀チベットを代表する学者ブトン＝リンチェンドゥブにより著されたもので、インド・チベット仏教史およびチベット大蔵経成立史を研究する上での基本資料として詳細な研究がなされてきた。しかし、その第1章仏教概説の部分は、14世紀チベットにおける仏教理解の一端を解明する上で必要不可欠な資料であるにもかかわらず、未だ詳細な研究はなされていない。その理由は、研究のための基本的な作業、すなわち校訂テキストや引用箇所同定の作業などがなされていなかったためである。この現状に鑑み、2022年に本研究班が公刊した校訂テキストに基づいて和訳研究を行う。2025年度は、〔釈尊の〕御言葉 (bka’) の定義と語源を述べる箇所 (校訂テキストの pp. 56.6-64.3) の訳註を完成させ、これを『研究所紀要』で発表する。

- (3) 『モンゴル仏教史』の翻訳研究

2019年に本研究班が刊行したイエシェー・ペルデン著『モンゴル仏教史・宝の数珠』(寺本婉雅旧蔵)を、そのモンゴル語版と対照し詳細な注を付した和訳研究を行う。2025年度は、モンゴルの王統に関する部分 (チベット語版で 7a5~22b) についての訳註を『研究所紀要』で発表する。

宗教・社会研究

宗教と社会の関係をめぐる

総合的研究

—社会的なものとしての宗教—

研究代表者・准教授 後藤 晴子
(文化人類学/民俗学/社会学)

研究の目的：

多様な価値観を内包する現代社会において、様々な変化を強いられているなか、宗教のあり方もまた問われている。当然ながら、現代社会において、宗教が果たすべき役割やその可能性をより多角的な視点から見直すべきとの声も強まっている。そこで本研究は、宗教と社会との多種多様な関わり合いが見られる現代の東京・首都圏という場において、専門性を異にする研究員たちが各自のディシプリンに基づく独自の視点から、社会における宗教の役割を問い直すことを目的とする。

研究の目標：

人類にとって根本的な問いであり続ける、「どう生きるのか?」「どう死ぬのか?」という問題を主軸とし、宗教というフィルターを通して、社会に存在する、もしくは存在した様々な価値観の構造を明らかにすることを目指す。具体的なテーマとしては、生命倫理、死生観、道徳、優生思想、性差、人権、公害、秩序、政教分離、メディア、多文化共生などを取り上げ、宗教との関係性を考察する。各年度に上記テーマに関連した研究会を開催することで当該問題に関する理解を深めるとともに、シンポジウムを開催して広く研究成果を大学の内外に向けて発信する。本年度も引き続きサブテーマとして「社会的なものとしての宗教」を設定し、私たちと宗教の多様な関係のあり方について考察し、宗教の役割を解明していく。

2025年度の研究計画：

2025年度も2024年度に引き続き「社会的なものとしての宗教」というサブテーマを設定し、私たちと宗教の多様な関係を考察し、現代社会における宗教の役割を解明していく。各研究員の研究計画は以下の通りである。

鶴留研究員は、『歎異抄』の解釈を通じて宗教的理念を考察する。『歎異抄』に示される宗教的理念は、個人的なものであると同時に、言語化され、共同体における共通の理念として示されるものである。その意

味で、宗教的「個」の理念は普遍へと、そして社会へと開かれている。これを学問的に確かめることによって、浄土真宗という一つの宗教とその理念が社会的なものとしての宗教という側面を有していることを明らかにする。

高橋研究員は、外国につながる人々への支援を中心とした社会課題に対して、宗教が果たす役割について明らかにする。移民・難民支援には多くの組織や個人ボランティアがかかわる中で、宗教関係者による支援にはどのような役割や意義が見られるのかを考察する。

藤井研究員は、近代社会における民衆宗教の展開を宗教集団に注目しながら明らかにする。教団、寺院・教会、サークルといった大小さまざまな集団単位が、民衆の生活課題に対してどのような機能を果たし、それが宗教の展開といかなる関係にあるのかを考察する。

繆研究員は、仏教の辟支仏と道家の真人という独修者像に着目し、両者の思想的特質と宗教構造における位置を検討する。両者の比較を通じ、独修者の主体性と宗教共同体との関係、さらには仏教思想の包摂性と多様性を明らかにすることを目的とする。

後藤研究員は、老年期における宗教との関わりについて、沖縄や北部九州をフィールドに人びとの実践や語りを地域的・文化的コンテクストのなかから明らかにし、「社会的なもの」としての宗教と人びとの生き方の関わりを考察する。

デジタル・アーカイブ資料室

大谷大学所蔵貴重資料の
デジタル・アーカイブの構築

室長・教授 箕浦 暁雄
(仏教学)

本資料室の目的は、大谷大学図書館所蔵古典籍等の貴重な学術資産のデジタル化を行うことによって、資料の保存と公開、そして学術研究への利便性を図ることである。

2025 年度においては、大谷大学図書館所蔵古典籍に関して約 1,150 冊の古典籍のデータベース構築を目標とする。従来、これらの古典籍のカタログは紙媒体のもののみが存在していたが、多くの研究者たちにこれらの古典籍の存在を伝え、研究に役立つようデータベースを構築している。本作業は 2015 年より継続中であり、現時点 (2025 年 12 月) では 21,685 件の古典籍のデータベースが公開済みである。

上記の目的および目標に基づく研究活動を概括すると、下記のとおりとなる。

- ① 大谷大学図書館古典籍のデータベース構築
- ② デジタル化された資料の保存と整理
- ③ その他の大学所蔵各種データのデジタル化と整理・保存、及び公開に向けての検討
- ④ 本学が取り組むべき各種データのデジタル化と整理・保存、及び公開に向けての検討

2025 年度においては、上記のとおり研究活動を推進する。

2025（令和7）年度「一般研究」等研究組織一覧

【共同研究】

研究名等	研究課題及び研究組織	
一般研究（佐藤愛弓班） 【2022～2026年度「科研費」採択】 研究代表者 佐藤愛弓	研究課題	勸修寺資料からみた文庫の形成・維持に関する総合的研究 —新たな寺院文化論として—
	研究員	佐藤愛弓（教授・国文学）
	協同研究員	上島 享（京都大学大学院教授） 藤原重雄（東京大学史料編纂所教授） 三好俊徳（佛教大学准教授）
一般研究（古谷伸子班） 【2023～2025年度「科研費」採択】 研究代表者 古谷伸子	研究課題	コミュニティ運動としての複合農業 —持続可能な農業の追求
	研究員	古谷伸子（講師・文化人類学／専門社会調査士）
	協同研究員	田邊繁治（国立民族学博物館名誉教授）
一般研究（木越康班） 【2025年度予備研究】 研究代表者 木越 康	研究課題	伝統宗教の未来に関する総合的研究 —過疎地域関係多世代住民への宗教動態調査から—
	研究員	木越 康（教授・真宗学／宗教学） 藤枝 真（教授・宗教学／哲学） 藤元雅文（准教授・真宗学） 松金直美（講師・真宗史）
	協同研究員	阿部友香（佐久大学講師） 磯部美紀（親鸞仏教センター研究員） 本林靖久（本学非常勤講師）

【共同研究】繰越による活動継続・補助事業期間延長

研究名等	研究課題及び研究組織	
一般研究（江森英世班） 【2020～2024年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長 研究代表者 江森英世	研究課題	健聴児ならびに聴覚障害児の数学的コミュニケーションの認知 —非認知能力の測定
	研究員	江森英世（元本学教授・特別研究員）
	協同研究員	竹村景生（天理大学教授）
一般研究（福島栄寿班） 【2022～2024年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長 研究代表者 福島栄寿	研究課題	九州沖縄仏教史・真宗史に関する研究 —布教ネットワークの分析と潜伏宗教の関係から—
	研究員	福島栄寿（教授・近代日本仏教史／近代日本思想史） 松金直美（講師・真宗史）
	協同研究員	知名定寛（神戸女子大学名誉教授） 川邊雄大（日本文化大学教授） 長谷 暢（真宗大谷派沖縄別院輪番・法政大学沖縄文化研究所国内研究員）

【個人研究】

研究名等	研究課題及び研究組織	
一般研究（寺川直樹班） 【2022～2026年度「科研費」採択】	研究課題	フランス人格主義を基点とした「人格の完成」の再検討 —道徳教育との関連もふまえて—
	研究代表者	寺川直樹（講師・教育学）

一般研究 (吹田隆徳班) 【2022~2026 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	薬師と阿弥陀：インドにおける浄土教の思想的変遷を追う比較研究 吹田隆徳 (任期制助教・大乘仏教 (インド)・特別研究員)
一般研究 (上野牧生班) 【2023~2027 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	世親『普賢行願論』のボタラ宮新出サンスクリット語写本研究 上野牧生 (准教授・仏教学)
一般研究 (徳田剛班) 【2023~2025 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	ポストコロナ期の日本の地方部における外国人受け入れと社会的共生に関する総合的研究 徳田剛 (教授・地域社会学/社会学理論/宗教社会学/専門社会調査士)
一般研究 (岡部茜班) 【2024~2027 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	居住支援を必要とする若者の生活状況と支援方策 岡部茜 (講師・社会学/社会福祉学)
一般研究 (野村実班) 【2024~2027 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	官民・市民の共創による地域モビリティの確保策に関する研究 野村実 (講師・社会学 (地域社会学/地域政策))
一般研究 (根無一行班) 【2024~2027 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	ポストコロニアル的視点からのフランス現象学と宗教哲学の再考 根無一行 (講師・宗教哲学)
一般研究 (高橋泉班) 【2024~2025 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	異文化の領域における支援に関する研究—インドシナ難民を中心に— 高橋泉 (PD 研究員・教育学・特別研究員)
一般研究 (藤井麻央班) 【2024~2025 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	教派神道体制下における教会の基礎的研究 藤井麻央 (PD 研究員・宗教学・特別研究員)
一般研究 (内田祐貴班) 【2025~2028 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	教員がデジタルを活用することで、小学校理科の理解を一層深める授業はできるか？ 内田祐貴 (准教授・理科教育/物理教育/物理学)
一般研究 (脇中洋班) 【2025~2028 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	司法面接的聴取を検証可能にし、非言語的表出を記録する試み 脇中洋 (本学名誉教授・特別研究員)
一般研究 (松田祥平班) 【2025~2027 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	戦間期における探偵小説ジャンルと文学・芸術言説の編成に関する研究 松田祥平 (任期制助教・日本近代文学・特別研究員)
一般研究 (中野加奈子班) 【2025~2028 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	「民衆のソーシャルワーク」に関する国際比較研究：その歴史、社会的実践とエートス 中野加奈子 (教授・社会福祉学 (社会福祉援助技術論/貧困問題/医療福祉/生活史研究))
一般研究 (橋口昌治班) 【2025~2028 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	労働組合におけるインターセクショナルな連帯に関する研究 橋口昌治 (任期制講師・労働問題/専門社会調査士/重度訪問介護従業者)
一般研究 (鄭祐宗班) 【2025~2028 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	戦争違法化の循環論批判 鄭祐宗 (准教授・歴史学)
一般研究 (アマミチヒロ班) 【2025~2027 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	Pre-WWII Japanese Buddhism in Saipan and Davao Ama Michihiro (教授・アメリカ宗教・文化/国際日本学)
一般研究 (平田公威班) 【2025~2027 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	ブレーズ音楽論からみた 20 世紀後半フランス思想研究 平田公威 (本学非常勤講師・特別研究員)
一般研究 (中西麻一子班) 【2025~2027 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	南インド仏教の仏伝図と聖蹟図に関する研究：カナガナハリ大塔に着目して 中西麻一子 (本学非常勤講師・特別研究員)

一般研究（繆寿楽班） 【2025～2026年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	インド仏教認識論の研究—ダルモッタラに見る認識プロセスの革新 繆 寿 楽 (PD 研究員・インド哲学・仏教学・特別研究員)
一般研究（下村優佳班） 【2025～2026年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	日本中世の地域社会における民衆の宗教受容とその表現—真宗絵画に着目して— 下 村 優 佳 (任期制助教・日本中世史・特別研究員)
一般研究（亀山裕樹班） 【2025～2026年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	ヤングケアラーの直面する「生活のかかったケアの強制性」の解消に向けた基礎的検討 亀 山 裕 樹 (任期制助教・社会福祉学（貧困研究）・特別研究員)
一般研究（田中正隆班） 【2025年度予備研究】	研究課題 研究代表者	世代交代する西アフリカ社会における若者の未来と生活戦略—三ヵ国のZ世代の比較から 田 中 正 隆 (教授・社会学／社会人類学／民俗学／アフリカ地域研究／専門社会調査士)

【個人研究】繰越による活動継続・補助事業期間延長

研究名等	研究課題及び研究組織	
一般研究（平田絵未班） 【2021～2024年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	日本人学習者のための韓国語発音教案開発—語頭平音の音響音声学的考察を中心に— 平 田 絵 未 (本学非常勤講師・特別研究員)
一般研究（清水洋平班） 【2022～2024年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	タイ国で発展した積徳行文献に基づく蔵外仏典の研究 清 水 洋 平 (本学非常勤講師・特別研究員)

【PD 個人研究／就任年月、50音順】

研究名等	研究課題及び研究組織	
個人研究（鶴留正智班）	研究課題 研究代表者	浄土真宗の古典に示される理念の研究 鶴 留 正 智 (PD 研究員・真宗学)
個人研究（高橋泉班）	研究課題 研究代表者	外国人支援における宗教に関する研究 高 橋 泉 (PD 研究員・教育学)
個人研究（藤井麻央班）	研究課題 研究代表者	近代民衆宗教の集団と実践に関する研究 藤 井 麻 央 (PD 研究員・宗教学)
個人研究（繆寿楽班）	研究課題 研究代表者	慈悲と無慈悲—仏教経典と道家典籍の対話 繆 寿 楽 (PD 研究員・インド哲学・仏教学)

2025(令和7)年度「一般研究」(新規採択課題)研究目的紹介

個人研究

教員がデジタルを活用することで、小学校理科の理解を一層深める授業は実現できるか？

研究代表者・准教授 内田 祐貴
(理科教育／物理教育／物理学)

理科授業においてデジタル機器を利用することは、児童の視覚的理解につながるなど、有効な方法だと考えられている。しかし、そのための環境整備は長年の課題であった。これに対し、学校現場でデジタルを活用できる環境の整備を推進するGIGAスクール構想が提唱され、コロナ禍もあり、2021年度末までに一気に環境整備が進んだ。

理科授業における、デジタル機器の利用は有効であると考えられており、児童教員双方が積極的に活用していくことが重要である。現在、理科教育における、デジタル活用の研究は重要テーマの1つとなっており、児童がどのようにタブレットを利用するかなど、児童利用の視点のものが多く論及されている。一方、最近の技術進歩もあり、今までは費用や利用環境の整備などの様々な点から難しかった、授業進行を支援できる理科のためのデジタル活用の可能性が高まってきた。理科の学習目標をこれまで以上に達成するために、教員を支援補助できるデジタル教材や指導法の研究も、早急に行っていかなければならない。

本研究の目的は、理科の理解を深める教員用デジタル教材の研究開発である。第1段階として、児童の観測測定活動と連携し、教員自身が授業支援などに活用できるデジタル教材と、その指導法を研究する。第2段階では、小学校教員志望の教育学部生や小学校教員との教育実践により、理科の理解という観点で効果を検証し、教員がデジタルを活用する有効性を明らかにする。

これらにより、デジタルを活用した理科の理解が深まる授業法を現場に提示授業におけるデジタル利用の有効性を、小学校や大学などでの教育実践を通じて、理科の理解という観点から明らかにする。これにより、理科の理解を一層深められる授業を実現するためのデジタル教材と活用の方法を小学校の現場に提供することを目指す。

科研費課題番号：25K06182

個人研究

司法面接的聴取を検証可能にし、非言語的表出を記録する試み

研究代表者・名誉教授 脇中 洋
(発達臨床 法心理学)

司法面接的聴取(代表者聴取)とは、18歳未満の児童や知的障害等を持つ者を対象に、性的犯罪や児童虐待の被害あるいは目撃の経験の有無を聞き取るもので、2015年度より本格的に実施されるようになった。聴取方法は、誘導を避けるべくオープンな質問をベースとしたNICHDプロトコルに則っており、実施された司法面接の8割程度は検察官が担っている。

しかし司法面接が実施され起訴されても、体験性に疑念があり無罪判決となった事案が少なからず見られており、筆者が弁護側から依頼された案件でも、司法面接によって体験性が引き出されたとは言えない事例がしばしば見受けられる。その原因として、形式的には誘導を避けていても、犯罪の構成要件を語らせるだけで済ます聴取に留まっていることがあげられる。

司法面接的聴取によって、被害あるいはその目撃の体験性を検証可能にするためには、体験当初の一次知覚的記憶や加害者との相互作用的なやりとりを聴取する必要があると考えられる。そこで時間分割質問や手がかり質問(「さっき～と言っていたけれど、それについて詳しく教えて」等)を活用し、一次知覚的記憶や相互作用を引き出す質問を聴取プロトコルに組み込んで練成すれば、検証可能性が高まると考えた。

本研究(科研費25K04823)の第一の目的は、練成された聴取プロトコルが検証可能性を高めると実証することである。このため児童を対象に、これまでの司法面接と練成された聴取方法に、体験性の識別可能性に違いが出るか、実験的に確かめることとした。

また本研究の第2の目的は、言語的応答に長けていない年少児や知的障害者を対象に、プレイセラピーに準じた自由な表出場面における非言語的表出を汲み取る試みである。これは実験的な実証が困難なため、児童福祉施設における職員からの聴き取りを行う。

以上の2つの目的のため実験や聴き取りを行う計画を進めているが、同時に法曹実務の現場から、児童虐待や性的被害事案において、司法面接的聴取を実施したものの疑念がある何件かの事件の検証を求められており、供述分析や再面接を試みているところである。

個人研究

戦間期における探偵小説ジャンルと文学・芸術言説の編成に関する研究

研究代表者・任期制助教 松田 祥平
(日本近代文学)

探偵小説と文学・芸術という概念の関係性は、戦間期の探偵小説ジャンルが既成文壇作家の影響を受けて発展したことに鑑みて、非常に重要な研究テーマと言える。しかしながら、当時の文学場における探偵小説ジャンルのポジションはいまだ十分に検討されていない。探偵小説系メディアの外部へと拡散した探偵小説の実相に至っては大部分が未整理のままである。そこで本研究は、戦間期の文学場における探偵小説の実態を明らかにし、それが当時における文学・芸術の概念把握をめぐる言説に及ぼした影響を測定する。そのために、戦間期のジャーナリズムを対象として探偵小説を網羅的に読解するとともに、ジャンル言及を収集・分析する。その上で、当時の文学・芸術概念に関する言及を収集し、探偵小説という視座から質的に分析することによって、ジャーナリズムにおける探偵小説の展開を動的に示し、それが文学・芸術言説の編成にどのように影響したかを明らかにする。

本年度は、1920年代の各種メディアに掲載された探偵小説および探偵小説言及を網羅的に収集し、掲載メディアの特性や傾向性、同時代の文芸思潮などを踏まえながら分析した。その成果については、10月19日に行われた2025年度日本近代文学会秋季大会にてすでに発表しており、今後の論文化も予定している。

また、当初の見込み以上の進展があったため、本年度は本計画に関連して占領期を対象とする研究も行うことができた。その成果については、9月27日に行われた坂口安吾研究会第45回研究集会にてすでに発表しており、こちらも論文化の準備を進めている。この展開によって、占領期における文学的状况を視座として戦間期を捉え直す新たな見通しが得られた。

次年度以降も、同様の手法によって射程を拡大していき、戦間期のジャンル状況を動的にとらえようとする本研究計画の完遂を目指す。

個人研究

「民衆のソーシャルワーク」に関する国際比較研究：その歴史、社会的実践とエートス

研究代表者・教授 中野 加奈子
(社会福祉学・ソーシャルワーク論)

本研究は、近代以前から人々が日常生活を維持するために築いてきた相互扶助の営みを「民衆のソーシャルワーク (Popular Social Work : PopSW)」と捉え、その歴史的特徴と現在の意義を明らかにするものである。ソーシャルワークは一般に国家資格や制度を基盤とする「公認のソーシャルワーク (Official Social Work : OSW)」が中心とみなされてきた。しかし現実には、制度の範囲を超える生活問題に対し、市民団体や当事者グループが重要な役割を果たしてきた。本研究は、この広範な民衆の営みをソーシャルワーク史に正当に位置づけ直すことを目的としている。

PopSWの視点を導入する意義は、ソーシャルワークを専門職の実践だけに限定せず、生活を共にする人びとの自発的な支え合いが持つ力を学術的に可視化できる点にある。制度が包摂しきれない領域で、人びとは自助と互助の精神を豊かに育て、地域の課題に粘り強く向き合ってきた。こうした営みは、ソーシャルワークの原点である生活の安寧を支える仕組みとして歴史的に存在し続けており、現代の複雑な社会問題においても依然として重要である。PopSWを視野に入れることで、福祉の未来に必要な多様な支え合いのモデルを提案できると考えている

本研究では、日本・イギリス・台湾・香港・カナダの事例を比較し、各地域でどのようなPopSWが形成され、どのようにOSWと関係してきたのかを明らかにする。特に、両者の間にある緊張関係と協働の可能性に着目し、専門職と民衆が相補的に関わる新たな協働モデルを提示することをめざす。PopSWの歴史的歩みを掘り起こし、そのエートスと実践形態を明らかにすることで、OSWの限界を補う知見を示し、「誰一人取りこぼさないソーシャルワーク」の実現に向けた学術的基盤を築くことができる。

調査は文献研究とフィールドワークを組み合わせ、地域に埋もれた実践の記録を収集するとともに、担い手への聞き取りを進める。最終年度には国際フォーラムを開催し、成果を共有しながら国際的な議論を深める予定である。

個人研究

労働組合におけるインターセクショナルな連帯に関する研究

研究代表者・任期制講師 橋口 昌治
(労働社会学)

20 世紀後半、「労働社会の終焉」(ドミニク・メーダ)など、近代社会における労働の中心性を見直す議論が提起された。また労働運動を「古い」と位置付ける「新しい社会運動」論が広く受け入れられ、労働運動の退潮も進んだ。近年も、AI などの発展による労働の喪失、あるいは無意味な仕事の蔓延を指摘した「ブルシットジョブ」論など、労働からの解放への希望と「労働なき労働者社会」(ハンナ・アーレント)への恐れの間で議論は続いている。このように、近代社会における労働の中心性が批判された後も、労働が人々の生活において重要な位置を占め続けている状況を、拙著『若者の労働運動』において「労働社会の変容」と論じた。

「若者の労働運動」は非正規労働者や「引きこもり」経験者を主な担い手とする個人加盟ユニオンによる運動であり、労働から疎外され孤立させられた人々が、それゆえに団結して労働問題に取り組んできた。変容した労働社会において、労働を集合的に問題にすることは難しく、まずは集まり、労働を問題にできる場を作り出すことが課題であった。

2000 年代以降、ユニオン運動の活性化もあり、労働問題への注目は増したが、過酷な労働環境や賃金格差が根強く残るなど、労働組合が人々の期待に応えられているとは言い難い。組織率も低迷するなか、「見捨てられる労働者階級」と相対的に権利拡張が進むマイノリティを対置し、「分断」を煽る言説が広がっている。そこで、「若者の労働運動」から派生し、「LGBTQs 労働相談」に取り組む「プレカリアートユニオン」(2012 年結成)に注目した。

本研究の目的は「プレカリアートユニオン」の調査を通して、労働問題に取り組む集合的な行動の拡大と、多様なアイデンティティの分断の回避を試みる労働運動の実態を明らかにすることである。そして、工場労働者をモデルとする「労働者階級」を想定した古典的な問題意識に回帰するのではなく、アイデンティティの差異によって生じる分断を、「労働」を通じた連帯によって克服することは可能か、という問いに取り組みたいと考えている。

個人研究

戦争違法化の循環論批判

研究代表者・准教授 鄭 祐宗
(歴史学)

本研究(科研費 25K04990)は、“実効的な紛争の平和的解決手段を欠いた戦争違法化は「平和を破る事態の発生」を制度として肯定している”と説いた田岡良一(1898 年～1985 年)のテーゼを吟味し、「戦争そのものの廃絶論議」に対して、「戦争の原因の不廃絶論議」を対置した当該国際法・国際政治研究の現代的意義を明らかにする。あわせて、国連創設後の複数の国際法学者による国際秩序構想のダイナミズムを捉え、戦後国際法・国際政治学における戦争違法化アプローチを相対化し、不戦条約から国連憲章に至る平和構想の発展の「捻じれ」を捉え、戦争違法化の循環論が power (法) をして power (力) に転化する「逆説」の体系を検討する。

その際、A) 現代国際法が国連を通じた集団安全保障を前提とすること、実際にその例外規定及び欠陥をいかなるものか考えるかをもって、差別戦争概念を一律に適用する必要条件が現在の国際社会に欠けていることを説く議論(制裁戦争論議の危険性批判、殲滅戦争への転化批判)と、B) 国連を通じた集団安全保障体制そのものが、実効的な紛争の平和的解決制度の完成を回避する迂回的な目的で規定されていることを議論の前提とし、その原則規定をいかなるものと捉えるかをもって、差別戦争概念の一律適用の非合理性を説く議論(二重基準批判論議)とを区別して把握する。

本研究の実施にあたっては、1) 国際法学者の戦後国際秩序論に照準し、朝鮮戦争の勃発が国際秩序を破壊したと捉えた通説的な国際法学者の認識と、朝鮮戦争の勃発を別様に捉えた国際法学者の認識を把握し、2) 後者の国際法学者の認識と田岡良一の国際法体系との理論的交錯について整理し、3) 戦後期の動態的国際法論の系譜に関わる現代的意義を再定義する。当該系譜を明らかにすることを通じて、国連誕生後に戦後期の国際法学者が現実の力と法との関係をいかに思考したか、この動態的国際法論の系譜が実定国際法・国際機構論に関わる新しい水準の理論研究にいかにつづくかを解明する。

個人研究

Pre-WWII Japanese Buddhism in Saipan and Davao

研究代表者・教授 Ama, Michihiro
(アメリカ宗教・文化/国際日本学)

本プロジェクトは、サイパン島とフィリピン・ダバオ地域における日本仏教の事例研究を通じて、第二次世界大戦以前の南洋諸島および東南アジア諸島における日本仏教の位置づけを初めて検証する試みである。本研究は、宗教と植民地主義を植民者と被植民者の視点で捉える従来の枠組みから離れ、サイパンとダバオにおける日本仏教徒と先住民、欧米系キリスト教徒との関係を地政学的かつトランスナショナルの観点から探求する。

今日まで、戦前にハワイ・北米大陸、「満洲」、朝鮮半島、台湾に進出した日本仏教については多くの研究がされてきた。一方、フィリピンをふくむ「南洋」地域に進出した日本仏教についてはほとんど目が向けられなかった。しかしフィリピンは「南方」へ教勢を張る各宗派にとって「南洋群島」と共に重要な拠点であり、「南洋」地域に展開した日本仏教を考察することは20世紀前半に大日本帝国の拡張と共に行われた海外布教の研究に新たな視座を加え、アジア・太平洋宗教研究にも貢献する。また「宗教」と「植民地主義」の研究は欧米研究主導のもと「大西洋地域」と「キリスト教」に集中してきたが、「太平洋地域」と「仏教」に焦点をあてることで、従来とは異なる「宗教」と「植民地主義」の関係を提示することができる。2025年度は国内での資料収集とサイパン島での現地調査を行う。

(本研究は2025年度～2028年度までのJSPS科研費JP25K03597の助成を受けたものです。)

個人研究

ブーレーズ音楽論からみた
20世紀後半フランス思想研究

研究代表者・特別研究員 平田 公威

本研究(25K16069)は、20世紀最大の音楽家であるP.ブーレーズ(1925-2016)に着目して、フランス思想を研究するものであり、とくに、構造主義との対決を背景にしながら音楽を論じたR.バルト(1915-1980)、M.フーコー(1926-1984)、G.ドゥルーズ(1925-1995)を体系的に研究することを目的とする。

広く知られるように、20世紀フランスでは、多くの哲学者が芸術を参照することで自らの思想を練り上げていた。たとえば、絵画に着想を得てメルロ＝ポンティが「知覚」の思想を提示したことや、文学作品が参照点となって、無意識的な言語の構造に着目する「構造主義思想」という一大思潮が形成されたことは有名である。こうした状況のなか、ブーレーズが牽引した戦後の音楽作品と作曲理論は興味深い仕方でも受容されている。すなわち、かれの作曲理論は、代表作《構造》(1951-1952)の題名が示す通り、作家性を排除するほどに厳密に形式化された構造主義的なものであったにもかかわらず、構造人類学者のC.レヴィ＝ストロースからは批判され、むしろ、構造主義批判の機運が高まった1970年代に入ると思想的に着目されはじめたのである。その象徴的な事実として、1976年にはフーコーがブーレーズをコレージュ・ド・フランスに推薦し、1978年には、フーコー、バルト、ドゥルーズがブーレーズを囲むかたちでのシンポジウムが開催されている。

本研究は、こうした思想史的事実に注目して、(1)レヴィ＝ストロースをはじめとした構造主義者によるブーレーズ評価に照らすことで、その音楽論の構造主義的側面と非構造主義的側面を明確にし、(2)構造主義の旗手と目されもしたフーコーとバルトが1970年代以降、構造主義的な言説分析を離れた後にどのような問題に取り組みながら、ブーレーズと交流し、音楽論を展開したのかを明らかにし、(3)ドゥルーズが1980年代以降、ブーレーズを通じて、どのように構造主義を批判し、自らの思想を練り上げたのかを解明する。こうした作業を通じて、1970-1980年代のフランス思想に特有の問題意識を解明し、その思想の内実と意義を示すことを試みる。

個人研究

南インド仏教の仏伝図と聖蹟図に関する研究：カナガナハリ大塔に着目して

研究代表者・特別研究員 中西 麻一子

本研究は、紀元前 1 世紀以降の南インドにおける仏教受容の様相を明らかにするために、新発見のカナガナハリ大塔（造営時期：紀元前 1 世紀～紀元後 3 世紀）から出土した浮彫を文献資料に基づく図像学的観点から解明するものである。仏教がその誕生地である東インドから南方へと伝えられていく伝播状況を、考古学的遺品に即して明らかにすることで、インド本土では失われた仏教僧団の活動を究明する。

研究代表者のこれまでの研究を通してカナガナハリ大塔の浮彫には、中インドのサーンチャー第 1 塔の図像表現が色濃く継承されており、文献資料ではそれらの表現が、南方上座部所伝の初期經典や仏伝文学の記述に合致することが判明している。その後、科研費（スタート支援 2018-2019 年度、および若手研究 2020-2024 年度）の採択を受け、継続して同遺跡の浮彫を個別に考察し、特に図像背景に描かれる情景描写や装飾文様を分析することで南インド仏教の独自性を明らかにしてきた。本研究課題については、この研究継続中（2020-2021 年度）に新型コロナウイルス感染症の感染拡大による渡航制限措置を受け、インド仏教遺跡調査の機会が失われたことが契機となり、これまでの現地調査で収集した研究資料（画像データ）を丹念に見直す過程で、カナガナハリ大塔の浮彫には仏伝図のみならず複数の聖蹟図が見出されたことにある。聖蹟図とはブッダの偉大な出来事が起こった場所を画像化したものであり、仏伝図と非常に類似するが、生成要因については区別する必要がある。したがって、仏伝図と聖蹟図がなぜ同時に同遺跡にあるのか、これら二種の生成要因を究明する必要があると考える。具体的な方法としては、（1）南インドを中心とする仏教遺跡の現地調査ならびに画像データのカタログ化、（2）出土した仏伝図と聖蹟図の図像学的研究、（3）収集した碑文の解説および分析、の 3 点を遂行し、南インド仏教が伝持した仏伝図と聖蹟図について正確な理解を提示したい。

個人研究

インド仏教認識論の研究—ダルモータラに見る認識プロセスの革新

研究代表者・東京分室 PD 研究員 繆 寿楽
(インド仏教)

仏教認識論において、確実な認識は、知覚 (pratyakṣa, 直観知) と推理 (anumāna, 概念認識) の二種のみとされる。これは、人間の認識の対象が、独自相と共通相の二つのみであるという根拠に基づく。このうち、知覚の対象である独自相とは概念的規定を離れた絶対的な実在個物を意味する。一方、推理の対象である共通相とは、個物間の関係を基礎にして人間の主観的な思惟作用によって構想された普遍に他ならない。これは言葉と結びつき、概念となる。したがって、ここで言う推理は、判断や言語行為などを含む概念的な思惟全般、すなわち概念認識 (kalpanā) を指す。法称思想の研究が始まって以来、仏教認識論研究は、知覚と推理を連結する知覚判断 (adhyavasāya) に対して一定の注意を払いつつ、知覚と推理を個別の課題として、両者の下位分類や認識対象、結果などの解明に心血を注いできた。知覚判断とは、例えば「これは煙である」といった普遍的概念を混じえた概念認識のことである。多くの研究の蓄積により、現在我々は知覚論と推理論の大枠を容易に把握できるようになった。しかし、知覚から推理を経て人間の目的達成に至るまでの認識の発生経緯の実態を全面的に捉える議論は、等閑に付されてきた。

本研究は、古典仏教認識論の中核をなす法上 (ダルモータラ Dharmottara 740-800) の思想に着目し、彼が構築した認識プロセス—すなわち知覚から知覚判断、知覚判断から推理、そして行動の開始に至る認識連鎖—の全体像を解明することを目的とする。従来の研究は知覚、推理、知覚判断などといった断片的な側面に焦点を当てていたのに対し、本研究は「証相の知」や因果関係から論理関係へ転換過程に特に注目し、文献 (法上著『量決択注』[Pramāṇaviniścayatīkā] 等) の精査を通じてそのプロセスの構造を明らかにするものである。また、既存研究との比較から、法上の認識論がもつ実用的な側面とその学術的意義を再評価し、インド思想史及び仏教学の発展に寄与する新たな視座を提示することを目指す。

個人研究

日本中世の地域社会における民衆の宗教受容とその表現—真宗絵画に着目して—

研究代表者・任期制助教 下村 優佳
(日本中世宗教史)

本研究の目的は、日本中世の地域社会で活動した浄土教念仏集団のうち「三門徒」系集団が、信仰的・地域的な一体性をもとにした「衆」的結合を通じておこなった絵画制作やそれに対する信仰の諸相、およびその展開を明らかにしようとするものである。

日本中世においては、国家という枠組みの中で、顕密寺社を基軸として宗教的秩序が維持される地域社会構造が形成されていった。一方で、時代の変遷にともなって、このような地域構造は変容していくのだが、その要因に、民衆による宗教活動の変容が指摘されてきた。本研究では前述したように、浄土教念仏集団、殊に初期真宗門流の流れをくむ「三門徒」系集団の活動に着目し、民衆における宗教受容と、その表現としての絵画制作や信仰の追究を試みる。そして、本研究活動により明らかとなる当該期の民衆の宗教活動と具体的様相から、従来語られてきた顕密寺社を基軸とした荘園制の崩壊にともなう地域社会構造の変容と、その大きな要因として指摘される民衆による宗教的自立という問題に答えることも目的としている。

研究方法は、民衆を包摂したゆるやかなヨコのつながり「衆」と、本末関係を前提とした厳格なタテのつながり「宗」を対置的に設定し、その中でも「衆」的結合をもとに制作された真宗絵画の分析をおこなう。特に、越前地域で活動した「三門徒」系集団が制作し信仰した列祖像（震旦和朝高僧先徳連坐像）、およびその周辺の関連する列祖像やその他の真宗絵画を検討する。当該列祖像は、上部中央に善導を配置し、上から下へと左右交互に和朝先徳を連ね描くという構図を有する。真宗絵画における列祖像の中でも、この構図を有した列祖像のほとんど全てが「三門徒系」門弟集団によるもので、さらに諸本は像容、札銘、絵画的特徴や表現など細かな部分において共通する一方で、各本にのみみられる表現や特徴など独自性もあわせ持つ。この共通と差異という二面性は「衆」的結合を反映されたものと推定し、当該絵画資料の分析をおこなっていく。

個人研究

ヤングケアラーの直面する「生活のかかったケアの強制性」の解消に向けた基礎的検討

研究代表者・任期制助教 亀山 裕樹
(社会福祉学)

本研究の目的は、ヤングケアラーの直面する「生活のかかったケアの強制性」の解消に向けた基礎的検討を行うことである。

現代の日本には、家事やきょうだいの世話、介護などのケアを担う子ども、いわゆる「ヤングケアラー (young carer)」が存在し、その教育や社会参加における不利を問題とする議論が起きている。彼らは1980年代のイギリスにおいて社会的注目を集めたのち、日本にも紹介され、主に福祉や介護に関連する問題として急速に支援体制が作られつつある。

ヤングケアラーに関する日本国内の支援体制をみると、ピアサポートやオンラインサロンといった、ケアを継続する子どものための事後的な支援が主である。しかしながら、ケアがその担い手に不利をもたらすものである以上、ケアをやめる、あるいはどこまで担うかを主体的に選ぶという選択肢を子どもに保障することもまた重要であろう。

そこで研究代表者の博士学位論文の研究は、なぜヤングケアラーはケアをやめる選択肢をとることが困難なのかを、貧困に着目して検討することを目的とした。ここでは詳細を省くが分析の結果、とくに貧困であるなど生活の維持が困難な世帯において、ケアを担わない限り生活が立ち行かず、自身や家族の生活を守るためにケアの継続を余儀なくされるという制約——いわば「生活のかかったケアの強制性」——にヤングケアラーが直面し、ケアをやめる選択肢をとることが困難になりうることを、多角的なデータに基づき実証的に明らかにした。

以上を踏まえて、「生活のかかったケアの強制性」の解消に取り組む必要があると考え、そのための基礎的検討として本研究の着想に至った。「生活のかかったケアの強制性」はなぜ解消すべき制約であり、どこまでどのように解消できるのか。これが研究課題の核心をなす学術的「問い」である。

共同研究

伝統宗教の未来に関する総合的研究—過疎地域関係多世代住民への宗教動態調査から—

研究代表者・教授 木越 康
(真宗学)

日本の伝統的地域コミュニティでは、寺院や神社などの宗教施設が長くコミュニティ活動の中心的な役割を果たし、住民の精神文化を支える柱となってきた。しかし少子化と都市圏への人口集中によって過疎地域はコミュニティ解体の危機に瀕し、このような宗教伝統にも大きな影響が及ぶことが危惧されている。本研究は、地域の秩序形成と維持に重要な役割を果たしてきた「宗教」に注目し、過疎化やコミュニティ解体をもたらす影響を分析した上で、伝統宗教の未来継承の形を総合的に研究する。

この研究は、申請者を中心として 2017 年以來継続して行ってきた研究活動に基づくものである。当初から歴史学・宗教学・社会学・地域福祉学・宗教学・真宗学の多分野の研究者が協働で行ってきたが、今回の研究では、これまで調査の核としてきた過疎地域住民の宗教動態調査を拡充し、他出者の多世代住民への聞き取りを中心的に行う。多分野研究者によるこれまでの調査分析に「多世代関係住民の声」という新たな視点を加え、伝統宗教の未来への継承を実現するためのプラットフォーム（議論のための土台と体制案）を提示することを目指す。

これまでは過疎地域として、具体的には岐阜県大垣市の揖斐川町春日地区の調査を進めてきた。2025 年度の本研究班では、同地区からの移住者が多いと想定される近隣の池田町での調査を実施する。これまでのアンケート調査によって得られた協力者に対して、基本的には対面での聞き取りを行い、春日地区との関りや宗教的風土への関わりを調べる。既存の情報と照合の上で、過疎地域の宗教継承に関して検討を加える。

個人研究

世代交代する西アフリカ社会における若者の未来と生活戦略—三カ国の Z 世代の比較から

研究代表者・教授 田中 正隆
(社会学/社会人類学/民俗学/アフリカ地域研究/専門社会調査士)

近年の西アフリカでは、急速な人口増加と若年層の拡大を背景に政治・社会の構造変化が進んでいる。政治においてはアクターの世代交代が進展する一方、選挙によって正統性を得た政権が権威主義化し、政治的自由を制限される傾向が顕著となっている。とくに言論の制約や結社・党派形成の困難化は、市民社会の萎縮と社会的閉塞感を生み、若年層の将来選択や社会参加の形態に深い影響を与えている。本研究は、このような移行期的状況におけるアフリカの若者、とりわけ Z 世代がどのように未来を構想し、日々の生活を切り拓こうとしているのかを文化人類学の視座から比較分析することを目的とする。

従来のアフリカ若者研究は、アイデンティティ形成や「若者文化」といった領域に焦点を当てる傾向が強く、政治経済的制約や社会構造との連関を射程に入れた研究は限定的であった。筆者の先行研究でも、若者とマスメディアの関係性を軸とした検討が主であった。本研究は、これら先行的枠組みを再検討し、教育制度、就職・就労、宗教実践、政治的言説、家族・親族ネットワークといった複数領域にまたがる若者の実践を総合的に捉えることで、世代交代期の社会変容と若者の自己形成との相互作用を明らかにする。

調査対象は、歴史的背景・政治体制・経済的発展段階が異なる三カ国として、ベナン（コトヌ、ロコサ）、トーゴ（ロメ、アヴェ）、セネガル（ダカール）をとりあげる。これら三国は、植民地期以来の政治制度の差異や宗教的多様性、市場経済の成熟度などにおいて特徴的な差異を保持しており、比較対照に適している。本研究では、参与観察、個人・グループインタビュー、政策文書の分析、現地発行物の収集など、多層的な民族誌的手法を組み合わせる。特に、若者のネットワーク形成、メディア利用、コミュニティ実践を中心的分析軸とし、都市と地方の循環・移動のダイナミクスを重視する。これにより、若年層が直面する経済格差、エスニック緊張、宗教的多元性、政治的制約が、生活戦略や未来構想にいかに関与しているかを立体的に把握する。

2025(令和7)年度東京分室 PD 研究員個人研究 研究目的紹介

個人研究

慈悲と無慈悲

— 仏教経典と道家典籍の対話

研究代表者・東京分室 PD 研究員 繆 寿楽
(インド哲学・仏教学)

古来より、仏教思想は道家思想と多くの接点を有してきた。東晋時代には、老荘思想の語彙や概念を介して仏教を理解する格義仏教が興り、悠久のガンジス川流域で発展した仏教が、老荘思想と通じる観念を有し、言語や文化の壁を超えて相互理解が可能であることを示唆した。このような歴史的背景のもと、中国仏教と道家思想の比較研究はすでに多く蓄積されているが、インド仏教の思想的文脈を軸に据えた老荘思想との比較研究は、依然として限定的である。両者の思想体系の特質と差異を検討することは、仏教思想の新たな側面を照射する試みである。

1. 辟支仏の思想的性格の解明 辟支仏の存在は仏教思想において独自の意義を有するが、声聞や菩薩と比較すると、長らく注目を受けることが少なかった。『仏光大事典』などの伝統的解釈体系では、彼らを「仏の教えを受けず、師を求めずに独りで悟りを開き、静寂を好み、慈悲がなく、説法や教化を行わない聖者」として説明している。しかし、阿含経典を基盤に辟支仏の形象を分析すると、その概念が仏教の発展において深く、かつ積極的な思想的価値を有していることが明らかとなる。一方で、同一経典内においても辟支仏像は必ずしも一貫した傾向を示さない。このような複雑性を踏まえ、本研究では、辟支仏の積極的意義を主軸とし、初期仏教を含む多様な経典群を参照しつつ、その思想的内実と機能的定位を多角的に明らかにする。

2. 辟支仏と真人の比較思想研究 本研究は、仏教における辟支仏と、道家における真人という二つの独修者像に焦点を当てる。両者はいずれも、人との交わりを避け、他者の教えに依存せずに自力で真理を悟る存在として描かれる。こうした独修者の性格は、宗教共同体において孤立を生みうる一方で、宗教の構造的多様性を象徴するものでもある。彼らを宗教団体の枠組みの中に包摂する際には、その定義や解釈に修正が加えられてきた。本研究では、この「修正と再解釈」の過程を分析し、独修者と集団との関係構造を明らかにすることを目的とする。

公開研究会・講演会報告 (2024.12.1~2025.9.30)

「水俣病事件における倫理と宗教—「本願の会」を中心に」

東京分室長・准教授 後藤 晴子

元東京分室 PD 研究員 磯部 美紀・澤崎 瑞央

東京分室 PD 研究員 鶴留 正智・高橋 泉・藤井 麻央

2024年12月13日(金)に大谷大学真宗総合研究所東京分室の指定研究の活動として、学内研究会「水俣病事件における倫理と宗教—「本願の会」を中心に」を響流館3階マルチメディア演習室にて開催した。講師に、萩原修子氏(熊本学園大学・教授)をお招きし、教員と学生、約20名程度が参加した。

水俣病は公害病の典型であり、有機水銀が魚介類を汚染し、それを摂取することによっておこる種々の健康被害である。不知火海(八代海)の汚染は、その有毒性・因果関係を知りながら有機水銀を排水しつづけたチツソ、それを止めなかった国・自治体によってひきおこされ、汚染された魚介類を摂取した多くの人びとに被害をもたらしている。その被害への賠償、有責任の認定、患者としての認定を求めて裁判が行われ、現在もなお、終わらない事件である。

本研究が注目したのは、この事件が問いかける宗教と倫理である。水俣病を告発した石牟礼道子『苦海浄土』、また水俣病患者・緒方正人の「チツソは私である」、これらに代表される水俣病事件のことばは、私たちに水俣病とは何かを教え、人間の苦悩とは何かを問いかけている。この石牟礼、緒方らが中心となって生みだされた一種の運動が「本願の会」である。「本願の会」は水俣の埋立地に野仏を祀ることを設立の趣旨としつつ、『魂うつれ』という雑誌を発行して活動も行っている。「本願」とはきわめて宗教的なニュアンスを帯びたことばであるが、しかし同時に、「本願の会」において表現されているものは既存の宗教、教団の枠にとらわれてない。講師の萩原氏は、この「本願の会」について調査・研究を行い、「本願の会」の宗教性・非宗教性、そして倫理について考察を深められてきた。

講演の冒頭で萩原氏は、水俣病という災禍の渦中で生み出される言葉の豊饒さに関心を抱き、研究を始めたことを紹介した。萩原氏は、緒方正人や杉本栄子の言葉を取り上げながら、これまでの思考やことばの枠組みがまったく無効になる「ことばの臨界」から、語

りによって生み出される新たな主体に注目する。彼らの苦悩は、自然や「命」、「魂」をも含めた「対話」によって言語化されたものである。そこにあらわれる「命」「魂」「本願」「祈り」「のさり」などの宗教的な語彙は、彼らにとっては身体化された風土の言語であり、既成の宗教によって与えられる言葉とは一線を画す。宗教を拒否し、自分の言語で問い、一人で向き合い、自ら言語化していく——そこに萩原氏は倫理の起動をみる。憎悪、復讐、怨念、憎しみ、悔しさ、悲しさといった主体をのみこむ感情は、語りによる主体の変容により解放され、そしてゆるしへと向かう。そのゆるしには彼らそれぞれのニュアンスがあるが、チツソや行政を「赦す」ということは、被害者や支援者からの反発を招く。

その中で、萩原氏は、「赦す」とは、何でも受け入れるということではない、対等な対話を企図するという緒方正実の言葉に注目し、これは「もやい直し」に通じるものであると分析する。和解が終着点ではなく、対立構造を超えて「命」に向っていくその在り様に、水俣病事件の一つの特徴が見出される。そして、「ことばの臨界」の間に佇みつづける緒方正人に象徴されるように、水俣では今なお、「生きている」語りが発せられているのである。萩原氏の講演を受け、フロアの教員や学生からは様々な質疑、コメントが寄せられ、活発な議論が行われ盛会のうちに終了した。



「石牟礼道子の言葉と行為」

東京分室長・准教授 後藤 晴子

元東京分室 PD 研究員 磯部 美紀・澤崎 瑞央

東京分室 PD 研究員 鶴留 正智・高橋 泉・藤井 麻央

2025年3月10日（月）に、大谷大学真宗総合研究所東京分室が主催となり、飯嶋秀治氏（九州大学大学院人間環境学研究院・教授）を講師として招聘し、「石牟礼道子の言葉と行為」という題目で公開研究会（ハイブリット）を開催した。本企画は「水俣と宗教」の関わりを問う一連の研究会の第2回目にあたる。

飯嶋氏は、「人間が危機とどう付き合うのか」という問いを主題に、先住民、児童養護施設、水俣、民俗宗教など多様なフィールドにおいて「人間環境学」の見地から長年実践的に研究を重ねられてきた。特に水俣に関しては、大学の授業の一環として学生たちとフィールド調査を重ねて民俗誌を蓄積するとともに、膨大な石牟礼道子の著作を整理し、そこから私たちが何を学びうるかという視点から、人間の危機についての考察も行っている。今回の研究会では、とくに飯嶋氏の石牟礼に関する議論を踏まえ、水俣病の患者ではない石牟礼が他者の苦悩に直面した際にどのように言葉を紡ぎ、我々はこうした言葉や行為から何を学ぶことができるかという点について、宗教学的に考察することを試みることを目的とした。

対面会場は、東京分室と同じ建物にある親鸞仏教センターにご協力頂き、親鸞仏教センター3階を講演会場とした。会場には、本学の廣川智貴前真宗総合研究所所長、後藤晴子東京分室長をはじめ東京分室のPD研究員のほか、親鸞仏教センターの関係者、社会学を専門とする神奈川県政策研究センターの研究員などが参集した。またオンラインでは70名程度の参加者が参加し、水俣病事件など災禍における人間の宗教性や、水俣病を描いた作家としての石牟礼道子への関心の高さが窺われた。

飯嶋氏の講演は、まず水俣の研究にいたるまでの飯嶋氏自身の研究の来歴を確認するところから始まった。飯嶋氏が水俣研究に関わるようになったのは、医師で水俣病研究の第一人者である故・原田正純氏が熊本学園大学に着任された後に、飯嶋氏が同大学に非常勤講師として着任したのがきっかけであったという。

水俣病事件を扱った従来の調査が、被害状況や患者の症状を客観的に捉えることを主眼としてきたのに対し、飯嶋氏の水俣研究は、一漁村に暮らす住民の側に

主軸が置かれている。これは、従来の調査に対する住民側の思いを踏まえた視点の変更に基づくという。さらに1969年に刊行された『苦海浄土』から続く著作に見られる石牟礼の「言葉と行為」については、人間環境の発達史としても読み解く。そして、調査地との信頼関係は、最終的には研究者が書いたものを提示することによって構築されるということが、長年幅広くフィールド調査を実施してきた飯嶋氏自身の見解としても語られた。

また講演で飯嶋氏は、水俣病患者で「本願の会」の設立者である緒方正人氏の、魚のいのちに対する問いや幻覚症状に着目し、そこにはいわば「漁労民」ともいえる緒方の発想が、オーストラリア先住民の発想と近似しているという共通点を見出せる等の指摘も行っていった。これはオーストラリア先住民という狩猟採集民族に関する研究の蓄積を有する飯嶋氏ならではの視点であり、氏の研究が豊かなフィールド経験による考察に基づいていることを感じさせられた。

講演後は、会場参加者やオンライン参加者からも質疑やコメントが寄せられ、活発な議論が行われた。本研究会では、水俣の事例を基に他者の苦悩を捉え、そのあり様を再考する飯嶋秀治氏の試みを通じて、参加者に有益な視点を共有できたと思われる。



被傷性への感受性—宗教研究者の戦争体験を踏まえて—

東京分室長・准教授 後藤 晴子

大谷大学真宗総合研究所東京分室 PD 研究員 鶴留 正留、高橋 泉 (執筆担当)、
藤井 麻史 (執筆担当)、繆 寿楽

2025年6月30日(月)に、大谷大学真宗総合研究所東京分室が主催となり、東京大学大学院人文社会系研究科教授である西村明氏を講師として招聘し、「被傷性への感受性—宗教研究者の戦争体験を踏まえて—」という題目で公開研究会(ハイブリッド)を開催した。本企画は「水俣病と宗教」の関りを問う一連の研究会の第3回である。

西村明氏は、原爆投下という災禍に見舞われた長崎において長年フィールドワークを実施し、宗教学的に戦争死者慰霊について考察し、かつ水俣についても論考を発表されている。今回の研究会では、こうした論考を踏まえて、他者の被傷性にどのように向き合い得るかについて宗教学的に考察することを試みた。

公開研究会は、東京分室と同じ建物にある親鸞仏教センターにご協力いただき、親鸞仏教センター3階を講演会場とした。会場には、後藤晴子東京分室長をはじめ東京分室のPD研究員とともに、親鸞仏教センターの加来雄之副所長をはじめ所属研究員、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程の学生などが集まった。また、さまざまな周知を行ったところ、オンラインでは30名程度の参加者が集まり、戦争体験や水俣病事件などの災禍における人間の宗教性や、宗教学の研究方法を再考することへの関心の高さが窺われた。

西村明氏の講演では、まず研究をするという営みについて、これまでの西村氏の研究来歴とその多様な背景を確認することからはじまった。ここで述べられる背景とは単なる研究関心を醸成する事実ではなく、西村氏自身の生の経験から災禍という出来事を通じた被傷性がどのように体験され、受け止められうるかという宗教学の問いそのものを内包している。

このような視点から、今回西村氏は1970年代後半に不知火海総合学術調査団に参加して、水俣病の劇症患者が多出した集落での独自のフィールド調査を行った宗教社会学者の宗像巖(1920-2007)と、清沢満之をはじめとする宗教者の人格に対する宗教心理学的アプローチと生命倫理や死をめぐる比較宗教学的思索で知られる宗教学者の脇本平也(1921-2008)に焦点を当てられた。この同時代を生きた二人の宗教研究者は、いずれも海軍将兵としての従軍体験があり、その事実がその後の研究の営みに何らかの影響を及しているこ

とが想像される。そして、それぞれの研究において必ずしも主題として前景化することのない個人史的背景が研究の方向性を潜在的に規定するあり方に目を凝らし、調査研究という形で被傷性に向きあう営みについて改めて考えることを試みたものである。

宗教学は、特定の信仰的立場にかかわらず、多様な宗教現象の科学的な研究を試みるものである。これは、脇本の師であり、日本の宗教学の方法論確立に努めた岸本英夫が強調した点である。こうした宗教学の性格を踏まえた上で西村氏が問題提起したのは、宗教研究者から生じる問いが、その人自身が生きる現実から生まれてくるということを改めてみつめることである。それは、フィールドに入る研究者は、水俣病事件など、学問的トピックとしても採用しやすい事例を研究対象とみなし、果して規範的アプローチのみを採用して現地の人々と対峙してきたのか、という点にも繋がる。宗像や脇本などの宗教研究者の営みとその解釈を通じて、現代の宗教学に架橋する何かを生み出すことはできないかというのが、今現在の西村氏の宗教学への想いとしても述べられた。

講演の後には、会場参加者を中心として活発な質問が飛び交い、宗教研究者の信念と学問的アプローチ、宗像における美と研究の関係性等について議論が行われた。閉会に際して、箕浦暁雄真宗総合研究所主事は、西村氏の人間をみる眼差しの深さに触れ、自らの学問への向かい方を改めて考える機会となったと述べた。本研究会では、宗像や脇本の事例を基に人間の被傷性への感受性を再考する西村明氏の試みを通じて、参加者に有益な視点を共有できたと思われる。



海外研究調査報告（2025.4.1～2025.9.30）

国外研究調査報告（2025.7.20）韓国

東京分室 PD 研究員 高橋 泉

2025年7月20日（日）に真宗総合研究所東京分室 PD 研究員の個人研究活動として、国外における移民コミュニティの事例を参照し、多様な宗教実践の実態を明らかにするために、現地調査を実施した。

当日は、はじめにソウル特別市内の Y 教会を訪問した。Y 教会は 1950 年代に天幕教会を設立し、その後積極的な布教活動により教勢を拡大して祈祷院や聖堂等の宗教施設を次々に設立した。当時の宗教指導者を中心とした独自の宣教活動が継続的に展開された結果、1990 年代初頭には 70 万人の信者を抱えるいわゆるメガ・チャーチに拡大した。Y 教会は同時に海外宣教にも力を入れており、特に 1960 年代以降は日本も宣教対象地として全国に積極的な布教活動が展開され、国内には Y 教会系列宗教組織による会堂建設の流れが押し寄せた。

今回の Y 教会への訪問により、日韓対訳の宗教関連書の作成や日本語礼拝の実施、在日韓国人教会との信者交流が確認され、Y 教会は移民としての在韓日本人に対し豊かな宗教実践の場を提供していることが明らかにされた。また教化の目的に応じて複数の建物を所有する Y 教会には、宗派独自の經典に関する専門書を中心に配置した図書館のほか、世代間交流を目的とした個別の礼拝堂などが設置されていた。さらに主たる礼拝においては、韓国語で行われる説教に対する多言語同時通訳が実施されていたほか、7 か国に及ぶ外国語礼拝が展開されており、地域における在韓外国人の宗教的拠点として多様に機能する実態が示された。

次に、同じくソウル特別市内の O 教会を訪問した。O 教会は 1980 年代に宣教院関係者を中心とした複数の信者家庭により教会設立に向けた弟子訓練を開始するとともに、信徒拡大を目指した大規模な集会を継続的に展開した。1990 年代には 1 万人を超える規模の信者が集う教会に拡大し、海外宣教も開始して教会独自の訓練を受けた宣教師を世界各地に派遣した。

また在韓日本人を対象とした宗教実践の場が設定されており、各宗教活動の運営には在韓日本人信者と韓国人信者がともに携わる形で、在韓日本人信者の信仰養成プログラムが構築されていた。具体的に O 教会で

は、午前中は韓国語を中心とした世代別の礼拝が実施され、午後は複数の礼拝堂を用いた外国語礼拝が展開されていた。さらに日本国内における系列教会との交流が年間を通じて盛んに実施され、信仰強化のために体系化された独自の宗教実践を展開する様相がうかがわれた。また O 教会は、在韓日本人信者を対象とした韓国語教室を定期的に開催し、移民にとって定住生活の基盤となる現地語の学習支援にも力を入れていた。O 教会は、同じ信者同士という背景の下行われる韓国語教室を通じて、生活に密着した言語習得の機会提供を行い、また定住生活で必要となる諸情報交換の場としても機能していた。こうして韓国における移民コミュニティの一つとなっていた O 教会は、日本における宗教組織による在日外国人支援活動と同様に、宗教が異国における移民の定住生活に果たす役割を示した事例と捉えられた。なお Y 教会及び O 教会それぞれの宗教実践に加わる在韓外国人信者の入信の経緯については、今後に残された調査の課題となった。

世代交代する西アフリカ社会における若者の未来と生活戦略—三カ国の Z 世代の比較から

一般研究 (田中正隆班) 研究代表者・教授 田中 正隆

【研究目的】

本研究は、西アフリカにおける政界の世代交代と同時進行する権威主義化の潮流の下で、Z 世代を含む若者がどのように未来像を構想し、複合的な制約環境(政治的閉塞、経済格差、エスニック関係の緊張、言論空間の閉塞化)を生き抜くための生活戦略を編み出しているのかを、文化人類学的手法により解明する。従来研究では、若者のアイデンティティ形成や独自文化の記述に比重が置かれ、政治経済的構造との連関、都市-地方の回遊・循環、家族・親族ネットワークの実践的機能、宗教における信仰と実務の横断的結合などの面が十分に分析されてこなかった。本研究では、教育から就職・就労、政治的言説への関与、キリスト教・イスラーム・在来信仰における宗教実践、メディア利用、コミュニティ参加、人脈形成(社会関係資本)の各領域を総合的に捉え、若者の主体性と社会的、環境的制約の相互作用を明示する。対象地域は、社会情勢・歴史的背景・制度的枠組みが対照的な三カ国として、ベナン(コトヌ、ロコサ)、トーゴ(ロメ、アヴェ)、セネガル(ダカール)とした。これらは都市化の段階、宗教的多様性、行政的分権度合い、国際市場との接続(物流・価格事情)において差異があり、比較研究として適している。分析の中心は、人脈(ネットワーク)、メディア、生業・コミュニティの三点とし、都市-地方連関(移動、送金、情報循環、供給網)を横断軸とする。なお、研究計画の導入として、2025年6月の第59回日本文化人類学会研究大会(於・筑波大学)で「若者、メディアと意見する人々」と題する口頭発表を行い、若者の意見表明の場の選択、自己表出の様式、発信プラットフォーム(コミュニティラジオ、視聴者参加番組、SNSグループ)における討議の実態、ならびに比較の観点(都市-地方、制度-草の根)の妥当性について、発表フロアからも有益な助言を得た。本研究ではその示唆を取り入れ、質問票・観察項目についてブラッシュアップした上で現地調査を実施した。

【現地調査の概要】

今回はベナンでの現地調査を行った。2025年7月31日に関西空港を出发し、韓国・仁川、ドバイを経

由して8月2日にベナンに到着、8月25日に帰国した。予備研究段階としてベナン南部(コトヌ、ロコサ)の都市・準都市・周辺農村に焦点を定め、パイロットサーベイ、参与観察、インタビュー、政策文書・現地刊行物の収集、人脈(行政担当者、学校関係者、農学専門家、NGO活動家、市場仲買、若手アーティスト、零細起業家、農家等)の基盤構築を行った。8月4~5日は関係者との連絡・打合せにより調査許可と協力体制を整備、6~8日はコトヌの主要市場で、売買のやり取り、価格形成、支払い手段、若者の就業形態(見習い・短期雇用・自営)の実態、情報の流通経路(メッセンジャー、ラジオ、張り紙)などを参与観察し、補足的に短時間インタビューを実施した。11~12日は近郊農家を訪問し、栽培品目(主食作物・園芸・新規作物)、農事暦、販路(市場直販・仲買・共同出荷)、青年の参入障壁(資金・土地・設備・家族内役割)、宗教行事との接合、栽培技術の伝播・承継について聞き取りを行った。13日にロコサへ移動し、18日まで中核市場と周辺コミュニティで、都市-地方の結節点としての物流事情、労働機会(荷運び・仲介・加工)、草の根イニシアチブ(教育・保健・農事普及)の活動状況を調査した。19~24日はコトヌに戻り、20日に市場観察の再現性確認を兼ねた再調査、21日に農学専門家へのヒアリング(農政と若者支援の接合、認証・品質保証制度、流通の実態)、22日に文化領域として、若手アーティストへのインタビュー(創造産業のネットワーク形成、表現の自由と制約、国際フェスなどの参加および招致の機会)を実施。23日は記録整理・出国準備、25日に帰国した。全過程で、インフォームド・コンセントの取得、匿名化など(政治的課題の取扱い、撮影の可否確認)のほか、記録の安全管理を行った。収集データは、フィールドノート、音声・写真(同意範囲)、政策・統計資料、コミュニティの掲示・配布物、SNS上の公開情報などで構成され、帰国後のコーディング・比較分析に耐える形式へ整備した。

【内容】

本研究で得た主要知見を、上からの開発(社会制度の整備)と下からの(草の根の、自発的な)開発の相

相互作用、若者の技能形成と起業の現状、農業の新潮流、都市-地方連関、メディアと意見表明の場、倫理・安全の観点に分けて整理できる。第一に、二期目政権の政策により電力供給と道路舗装を中心としたインフラ整備が進捗し、都市・準都市における商取引の効率化、夜間活動の拡張、情報流通の改善が確認された。他方、草の根の参加型教育・地域学習の長期継続により、第一・第二世代の資格取得、留学、起業への進捗が生み出され、地域内で技能・機会が循環する事例が観察された。NGOが主導しつつ国際援助機関との連携を模索する布置は、国家政策と市民イニシアチブの補完関係の可能性を示し、若者が公的支援と民間・コミュニティ資源を組み合わせる複線型の戦略を採用している点が注目される。第二に、政府の若者支援（コンクール、奨学金、短期研修）の拡充は、料理、宿泊、教育、会計、ジャーナリズム、PC技術などの職能形成を促進しているが、基礎教育から職業訓練へスムーズに接続されていないという問題点や、資格の市場価値の地域差、初期投資（設備・認証費用）へのアクセス格差が、就業の安定を阻む構造的課題として広まっていることが確認された。省庁の重心は文化から雇用・労働へとシフトし、政策体系の再編が進む一方、情報到達の非対称性、選抜過程の透明性への不信が現場の語りから読み取ることができた。

第三に、農業分野では、有機農業・アグリ・エコ（エコロジー農業）への若者参入が勧奨され、主食作物（トウモロコシ、マニオク）と輸出作物（綿花）の歴史的経験を踏まえつつ、健康志向・付加価値型作物への転換が萌芽的に広がる。山菜・キノコの栽培は、普及活動（栽培法の啓蒙、協力者募集、児童向け教育、調理セミナー）を伴い、無化学肥料の食品を疾病予防に資するとする市井の語りに支えられている。こうした運動は、知識のローカル循環（近隣学習、師弟関係、宗教共同体の場）を通じて拡散し、都市側の市場需要（健康食、外食産業の素材）と結びつくことで、若者の新規参入の窓を形成している。第四に、都市-地方連関では、ロコサの中核市場が周辺農村の供給と都市消費者の需要を結節する場として機能し、若者が物流・仲介・加工を担う例が増加している。市場の情報についてコミュニティラジオによる速報、SNSや露店間の口コミで部分的に平準化され、若者が情報仲介者として小規模ながら市場の透明性を高める役割を果たしている。送金は都市-地方の循環にとって重要であり、家族・親族ネットワークが生活防衛と投資（教育費、設備購入）を支える基盤となっている。

第五に、メディアと意見表明の場については、学会報告でも扱った通り、若者が場の選択（視聴者参加番

組や主に画像やテキストを表示する公開SNSなど）を通じてリスク管理を行い、自己検閲（語彙選択、暗喩、比喩、寡言）の作法を身につけていることが確認された。若手アーティストの語りでは、作品に社会的主題を織り込む際のバランス感覚（直接的批判を避け、生活断片・日常の違和感を通じてメッセージを伝える）や、地域ネットワークと国際フェス・レジデンスを併用した越境的キャリア形成が、表現の自由の制約下での合理的戦略として機能している。第六に、倫理・安全の観点において、政治的話題の扱いに段階的合意形成（導入-関心確認-センシティブ度の評価-記録方法の選択）を適用し、匿名化のレベル調整し、データ保全を徹底した。

これらの知見に基づき、今後は共通指標（ネットワークの利用状況、情報アクセス、就業状況、宗教実践の実態、都市-地方移動の頻度と目的、意見表明の場の選択基準）を用いた比較調査をトーゴやセネガル（ダカール）で実施する。選挙前後の社会意識の変容を時系列で追跡し、政策介入（若者起業支援、職業訓練、認証制度）の効果を、事例追跡とアンケート調査を併用して検証してゆく。予備研究で得られた人脉と情報を活用しつつ、課題として、調査協力者の安全確保、職業訓練と雇用機会のミスマッチ是正、農産品の市場アクセスと品質保証の制度設計、データの現在性をふまえて、次の調査研究を計画する。以上のとおり、調査結果の発信、比較枠組み・倫理手順・データ基盤を整備するうえで、本調査結果を有効に活用してゆきたい。

第20回国際仏教学会 (IABS) 学術大会出張報告

東京分室 PD 研究員 繆 寿楽

国際仏教学会 (International Association of Buddhist Studies, 略称 IABS) は、宗派を超えた寛容の精神のもと、科学的研究および学術交流を通じて仏教学の発展を推進する国際的学術団体である。1976年に設立され、1978年にニューヨーク・コロンビア大学にて第1回大会を開催して以来、世界各地で定期的に国際大会を実施してきた。

第20回大会は、2025年8月10日(日)から8月15日(金)まで、ドイツ・ライプツィヒ大学において開催された。本大会は30か国以上から研究者が参加し、48のテーマ別分科会および24のセッションで計450件を超える発表が行われた。会場では対面発表のほか、オンライン配信による聴講も実施され、映画上映会、円卓討論会、同窓交流会などの関連企画も併催された。テーマは初期仏教から現代仏教、文献学からデジタル・ヒューマニティーズ、さらにジェンダー・社会・生態倫理に至るまで、きわめて多岐にわたっていた。



本研究員の発表内容の説明をもって、出張報告とする。

発表題目: 「因果性と指示性: janyajanakabhāva と gamyagamakabhāva の再検討」 (Causality and Indication: Revisiting janyajanakabhāva and gamyagamakabhāva)

発表部会: 仏教における認識論と哲学 (Epistemology and Logic in Buddhism)

本発表では、インド仏教論理学における因果関係 (janyajanakabhāva) と論理関係 (gamyagamakabhāva) の連関を、法称 (Dharmakīrti, ca. 600-660) 以降の論師たちの議論を通して再検討した。法称は『因一滴論 (Hetubindu)』および『量抉択論

(Pramāṇaviniścaya)』において、結果(煙)が原因(火)を指示することの根拠を、両者の間に成立する不可離関係 (avinabhāva) に求めた。

アルチャタ (Arcaṭa, ca. 710-770) は『因一滴論注』(Hetubinduṭīkā) においてこの理論をさらに発展させ、個別的事物(煙・火)と普遍的概念(煙性 dhūmatva・火性 agnitva) を区別した上で、janyajanakabhāva は個物間の関係に、gamyagamakabhāva は概念レベルに適用されると論じた。彼は論証の成立条件として「無効な属性の排除」を強調し、煙性が理解手段 (gamaka) として、火性が対象 (gamyā) として確定されることを論理的に位置づけた。この理論は結果の特殊属性 (viśeṣadharmā) と原因の普遍属性 (sāmānyadharmā) を媒介する重要な橋渡しをなすものである。

一方、ドゥルヴェーカ・ミシュラ (Durveka Mīśra, ca. 1000-1099) は『因一滴論複注』(Hetubinduṭīkāloka) においてアルチャタの特殊・普遍区分を批判し、煙性と火性はいずれも普遍的概念に属すると主張した。さらに、アルチャタの弟子である法上 (Dharmottara, ca. 740-800) の『量抉択注』(Pramāṇaviniścayaṭīkā) に見られる精緻な理論を高く評価し、アルチャタの立場に修正を加えたとドゥルヴェーカ・ミシュラは指摘した。法上はダルマキールティおよびアルチャタの理論的枠組みを継承しつつも、独自の認識論的展開を示しており、その独創性は近年 Helmut Krasser および片岡啓らによって再評価されている。

本研究は、これら四論師の思想的展開を通じて、因果関係と表示関係の理論的差異およびその統合的意義を明らかにするものである。とくにアルチャタの論証構造の分析から、仏教論理学における因果性理解の深化と、その後のインド哲学的議論への影響を明確にすることができた。



本大会を通じて、仏教論理学研究の最新動向を把握するとともに、欧米・日本・韓国などの研究者との学術的交流を深めることができた。とくに同分野の第一線で活躍する研究者との意見交換は、今後の研究発展において極めて有意義であった。

本研究を踏まえ、今後はアルチャタおよび法上における因果性理論の継承関係をより精緻に検討し、仏教認識論における推理構造の再定義を目指す予定である。

本出張は、国際的な学術的交流の促進および自身の研究の国際発信という両面において大きな成果を得たものである。IABS 大会での発表および討論を通じ、インド仏教認識論・論理学研究の国際的ネットワークに新たな接点を築くことができた。



世界宗教学・宗教史学会第 23 回大会および 国際真宗学会第 21 回ヨーロッパ大会参加報告

国際仏教研究 研究代表者・教授 木越 康
庶務・准教授 マイケル・コンウェイ

2025 年 8 月 24 日 (日) から 30 日 (土) までポーランドのクラコフ市にあるヤギェロン大学を会場に世界宗教学・宗教史学会 (International Association for the History of Religions) の第 23 回大会が開催された。世界各国から 1,000 人ほどの宗教学者が集まり、「Out of Europe: Studying Religion (s) in Interconnected Worlds (ヨーロッパから出る: 相依っている世界における宗教を研究すること)」という共通テーマの下、研究交流を行った。

24 日 (日) の夕方に開会式と基調講演が開催され、27 日 (水) には遠足が企画され、また 30 日 (土) の午前中に発表部会の後に閉会式が行われたが、それ以外の日には、午前 9 時から 10 時半まで部会発表のセッションが開催され、その後、1 時間の基調講演が行われ、午後には、二回、1 時間半の部会発表が設けられ、夕方には、基調パネル等が講堂で催されるというスケジュールで予定が組まれていた。それぞれの発表セッションにおいて、約 20 部会が同時に開かれており、実に多様な発表がなされていた。以下において、報告者の発表内容を紹介し、行った研究交流について簡単に報告する。

報告者 (コンウェイ) は、8 月 26 日 (火) の午後の部会において「Reimagining Religion, Rethinking Philosophy: Theories and Methods from Buddhist Sources (宗教の再想像と哲学の再考: 仏教典籍からの理論と手法)」と題する、学会主催のパネルで「Can *Jiao* 教 Be Translated As “Religion”? A Perspective from China at the Close of the Northern Zhou Dynasty (「教」は「宗教」として翻訳できるか? —北周末の中国が提示する視点—)」という題目のもと、発表した。そのパネルは、仏教の文献を取り上げることによって、近年、「宗教」の概念や定義について行き詰ってきている議論について新たな観点を提示し、宗教研究の手法を前進させるために設けられた。近年の宗教学界において「Religion (宗教)」という概念に関する考察が進められ、それが近代的な造語であるから、前近代の文脈において使われるべきではないということが強く主張されているが、その立論を見

る限り、西洋の宗教史に基づいて展開されているために、偏っていると考えられる。そこで、今回の発表において、北周の廢仏事件に関する史料を紹介し、そこにおける「教」の概念の意味領域について考察することによって、現代の宗教概念に大いに類似する点が、当時の議論における「教」の用法にあるということを指摘した。その考察を踏まえて、宗教概念に関する議論の行き詰まりを乗り越えるために、多様な宗教的伝統が共存していた隋・唐代の中国の宗教史に注目することが有意義であると論じた。

大会の日程を通して、多くの発表を聞き、部会の議論に参加し、また多くの研究者と交流することができた。その中から、ここでは数名のみ紹介する。中国浄土教の専門家であるジョージア州立大学のケンダル・マーチマン氏と駒澤大学の藤井淳氏は私と同じパネルで発表した。また博士論文執筆のため本学に研修員として在籍したヤコブ・ザモルスキ氏は、主催校のヤギェロン大学で助教授として勤めており、日程を通して種々に情報交換を行った。大東文化大学の教授陣が、唐代の景教に関する碑文資料の研究成果を発表したパネルで宮井里佳氏とその同僚の発表を聞き、唐代における宗教的多様性について更に考えさせられた。東方仏教徒協会の編集長を務めたマイケル・パイ氏と南山大学の『*Journal of Japanese Religious Studies*』の編集を担当しているマッシュ・マクムリン氏とも久しぶりに再会し、東方仏教徒協会の活動について相談し、有意義な情報交換をすることができた。

30 日の閉会式において、東京大学の藤原聖子氏が新しい会長として就任したので、2030 年の大会は、日本で開催されることになるであろう。

なお 8 月 31 日 (日) に、9 月 1 日 (月) から 3 日 (水) に開催された国際真宗学会のヨーロッパ大会に参加するために、クラコフからイギリスのオックスフォードに向かった。その詳細について、下記に木越康研究代表者の報告を記載する。

2025 年 9 月 1 日 (月) から 3 日 (水) にかけて、イギリスのオックスフォード大学でヨーロッパ国際真宗学会第 21 回学術大会が開催され、マイケル・コン

ウェイ研究員と共に参加した。同大会は世界的学術団体「国際真宗学会（International Association of Shin Buddhist Studies）」を母体とするものであり、ヨーロッパ大会は2年に1度開催される言わば支部的活動である。今回はオックスフォード大学を会場に開催されたが、イギリスをはじめドイツやスイスなどのヨーロッパ諸国に加え、ブラジルや北米や日本など、世界中から多数の研究者が集う盛大な大会となった。

会場は、オックスフォードの中心部に位置する世界最古の公共博物館「アシュモラン博物館」内に設けられた。同博物館には著名な美術作品から考古学的価値の高い遺物まで幅広く収蔵されるが、参加者は期間中毎日、エジプトの歴史的遺物の間を縫って会場となったホールに向かった。

オックスフォード大学は、大谷大学第二代学長である南条文雄がマックス・ミュラーに師事してサンスクリットを学んだ地である。国際真宗学会は、浄土真宗本願寺派所属の研究者や海外開教使によって設立された学会であるが、今回は特に大谷大学の学問・教育にとって大切な意味を持つオックスフォード大学での開催であったため、コンウェイ氏と共に大谷大学から参加できたことの意味は大きかったように思われる。

大会は3日間にわたって連日9:30から夕刻まで発表が行われ、総計20を越える報告があった。総合テーマは“Peace and Harmony”であり、大会初日の新井俊一相愛大学名誉教授による基調講演「真仏と化身」を皮切りに、ケネス・田中（武蔵野大学仏教文化研究所）氏や那須英勝（龍谷大学）氏などからの貴重な発表が続いた。木越は大会初日に、“Peace and Harmony” realized by ‘other-power’ -Through Ryūkan’s thought-というタイトルで発表を行った。親鸞に大きな影響を与えた隆寛律師の他力思想を紹介した。隆寛は、「平和と調和」は、人間的な努力によってではなく阿弥陀仏の本願によって成立すると主張する。善導や曇鸞の思想に基づく視点であるが、そのような隆寛を紹介して議論を行った。2日目にはコンウェイ氏が「Was Daochuo Drafted in His Youth? A Consideration of How His Experience of War Influenced His Prioritization of Pure Land Buddhism」という題で発表し、道綽が還俗させられた後に徴兵された可能性を指摘し、その経験がその浄土教思想に及ぼした影響について考察した。

この度の大会では、発表者に加え、連日世界中から50名を超える参加者があり、報告内容も、浄土教思想や日本仏教史、仏教におけるAI技術の貢献可能性まで、さまざまであった。同学会の特徴は真宗の教化活動に携わる現場の開教使などからの報告もなされる

ところにあるが、今回はそのような立場から、ロンドンにある真宗寺院「三輪精舎」の前舎主である佐藤平氏からの報告も行われた。佐藤氏は1980年代に大谷大学のイースタンブuddhist協会、EB誌の編集に携わった人物である。現在はロンドンで教化活動を展開し、ヨーロッパに真宗の教えを伝えようとされている。「三輪精舎」は1992年以来ロンドンで教化活動を続ける仏教施設であり、氏は創設から深く関わり、長く精舎主を務められた。報告者は近年、過疎地域の寺院研究を行い、アメリカ真宗寺院の調査も行っているが、今回の大会の直前にはロンドンの「三輪精舎」を訪問し、佐藤氏や現舎主から、寺の歴史や活動の現状、メンバーの様子についての聞き取りを行った。日本はもちろん、アメリカの教化活動とはまったく異なる状況をお聞きし、大いに刺激を受けたことである。

この度のオックスフォードの学術大会で驚いたのは、龍谷大学から20名を超える大学院生の参加があったことである。同グループは「三輪精舎」などでの研修を終えて学術大会に参加したが、博物館の会場に限りがあるため、3日の期間を3班に分かれて、それぞれが1日ずつ大会に聴衆として参加した。期間中は研究の面で有意義な交流を行えたことはもちろんであるが、教育活動の面でも、龍谷大学の先生方や院生たちの積極的な活動に大いに刺激を受けたことである。加えて大会最終日には、真宗門徒としての立場を明確にする「帰敬式」が行われ、ヨーロッパ各国から8名の受式者があった。浄土真宗本願寺派の海外教化の面での長年にわたる努力の成果であるが、今後もますます海外教化活動に尽力されることを願うと共に、真宗大谷派や大谷大学の「真宗」を巡る諸活動の未熟さや不足を強く実感したことである。

既述の通り今回は大谷大学から2名の参加であったが、今後も本大会を含めた国際的な仏教・宗教学会に、国際仏教研究班として研究者や学生を派遣する道筋を絶やしてはならないと強く感じた出張となった。

国内研究調査報告 (2025.4.1~2025.9.30)

国内研究調査出張報告 長崎 (2025.9.1~2025.9.3)

東京分室長・准教授 後藤 晴子

東京分室 PD 研究員 鶴留 正智、高橋 泉 (鯛ノ浦教会聞き取り調査部分執筆)、
藤井 麻央 (憶念寺・真宗寺聞き取り調査部分執筆)、繆 寿楽 (巡検調査部分執筆)

2025 年 9 月 1 日 (月) から 3 日 (水) にかけて、後藤晴子 (東京分室長)・高橋泉 (PD 研究員)・鶴留正智 (PD 研究員)・藤井麻央 (PD 研究員)・繆寿楽 (PD 研究員) の 5 名が、真宗総合研究所東京分室指定研究の活動として、キリスト教や仏教、民間宗教などが混在する長崎県という地域に注目することで、諸宗教と現代社会とのかかわりの実態を明らかにするために、上五島町と長崎市への現地調査を実施した。なお、本調査は、九州沖縄仏教史・真宗史に関する研究 (22K00085) を進める本学・福島栄寿教授と、東本願寺沖繩別院・長谷暢輪番とともに実施した。以下では、調査概要を報告する。

1 日目である 9 月 1 日 (月) は、長崎港から鯛ノ浦港へ移動し、上五島町有川郷にある真宗大谷派・道光山憶念寺を訪れ、住職・本庄禎正氏への聞き取り調査を行った。明治時代まで五島には大谷派の寺院はなく、1879 年に有川説教所が開設され、1913 年に憶念寺となった。その後、寺院は現在地に移転している。有川はかつて捕鯨で栄えた町であり、訪問中は、子どもたちが鯨捕りに由来する弁財天 (鯨取り歌・羽差太鼓) の練習をする音が遠くから聞こえた。本庄氏も幼い頃に、町内の各軒を太鼓を打ちながら回った経験があるという。このように、捕鯨に関する文化が息づく町である一方で、現在は少子高齢化で人口減少が進んでいる。憶念寺では、40 年程前までは日曜学校を行い、地域の子どもたちが集っていたが、本堂の建て直しに伴い休止した。門徒は高齢者が多く、運営には難しさがあるものの、お盆の時期には住職だけでなく、坊守や息も全戸を訪ねるなど、本庄氏の話からは門徒との丁寧な関わりがうかがえる。また、本庄氏は社会福祉法人憶念寺会の代表を務め、寺院に隣接する保育所・歓喜園の運営を行っている。同園は終戦直後に設置され、80 年の歴史を持ち、現在 50 名の園児がいる。園児のほとんどは一般家庭の子どもたちである。有川にはかつて公立・私立をあわせて 20 程度の保育施設が存在したが、現在は半減し、当地での保育所運営は

厳しい状況にあり、今後も閉園が予想されている。こうした中、憶念寺会では、保育士不足に悩みながらも、新たな認定こども園の運営に向けた計画を進めている。こうした本庄氏の取り組みからは、少子高齢化の現実に対応しながら、地域の寺院が社会的役割を果たそうとする姿勢がうかがえた。



2025.9.1 憶念寺

1 日目の午後には、元海寺山門 (車窓見学)、丸尾教会 (車窓見学)、青砂ヶ浦教会、冷水教会 (車窓見学)、頭ヶ島教会、海童神社 (車窓見学)、大曾教会を巡検した。

元海寺は、紀州佐野村の西照寺出身の僧・残雪が 1646 年に当地へ招かれて布教を始めたことに由来する。1675 年に創建され、その後 1818 年に現在地へ移転した。現在の本堂は 1893 年の建築であり、山門は鉄川与助の設計による 1924 年の煉瓦造である。2012 年には長崎県「まちなみ景観資産」に登録され、景観的価値が認められている。

丸尾教会は 1899 年頃まで「家聖堂」と呼ばれる信徒集会所を母体とし、青砂ヶ浦教会主任大崎八重神父の時代に丸尾の丘の上に白亜の教会が建立され、正式な巡回教会として歩み始めた。その後、1972 年に改築され、1975 年には青砂ヶ浦小教区から丸尾小教区

へ独立した。

青砂ヶ浦教会は、1878年頃に初代教会が置かれ、1899年以降は上五島の中心的役割を担った。現在の聖堂は鉄川与助が設計施工し、1910年に竣工したもので、信徒が総出でレンガを運び上げた三代目の教会として、2001年に国指定重要文化財に指定されている。

冷水教会は1907年5月に献堂された。当時27歳の鉄川与助が独立して最初に手掛けた木造教会であり、内部には漆喰仕上げのリップ・ヴォールト天井が施されるなど、当時としては新しい意匠が採用されている。

頭ヶ島教会は1910年に石造の聖堂の建設が始まるが、資金難で工事は中断、1919年に竣工した。信徒たちは、石を切り出し、積み上げた。石には信徒たちの刻印が見られる。聖堂は、列柱をもたないことで、広さを確保しているのが特徴である。外観は水平に積み上げられた粗面仕上げの石壁が特徴である。

大曾教会は1879年に木造で創建され、その後1915年に若松町土井ノ浦教会として移築された。現在のレンガ造りの教会は、1916年に3年の歳月をかけて竣工したものである。鉄川与助の設計施工によるものであり、柱頭彫刻は父与四郎の手による。内部は三廊式、外観は煉瓦の配列による装飾性が特徴的である。



2025.9.1 頭ヶ島教会

2日目である9月2日(火)は、有川郷から鯛ノ浦郷に移動し、カトリック鯛ノ浦教会を訪れ司祭の話をうかがった。鯛ノ浦教会は、現在220世帯ほどが所属し、教会籍では650名程度の信徒が確認されるという。また従来のカトリック教会では、カトリック信者同士のみの結婚を認め、片方が他宗教の場合は結婚時の改宗を条件としていた。しかし、1962年-1965年の第2バチカン公会議以降、個人の自由意思が尊重されるようになったことで、家族内でも異なる信仰の状況が生じるようになった。また近年では、島内の就職先が介護職や行政職などに限られてきており、若い世代は島

外に仕事を求めて離島するケースが増加している。なお第2バチカン公会議以降の諸宗教との対話における教会指針については、カトリック中央協議会が手引書にまとめている。

また教会における子どもを対象とした信仰の養成については、カトリック長崎大司教区発行のテキスト『まるちれすー子どものための教会史・長崎一』が用いられている。同テキストは、宣教師フランシスコ・ザビエルの来日から26聖人の殉教、かくれキリシタン迫害と信徒発見などの歴史的事実を示すと共に、信仰を守り抜いた人々の行いに見られる聖書の教えを説きながら、子どもたちに「信仰とはどのようなものであるか」ということを問いかける教理教育書である。

さらに、2018年の「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の世界文化遺産登録後は、巡礼だけでなく観光目的の教会訪問者が急増した。教会は信徒にとって聖なる祈りの場である中、こうした制度化の過程においては、観光客による礼拝堂内での無許可撮影やミサの時間の制約など多様な課題が顕在化するようになった。このような課題への対応を巡っては、教会側と新上五島町役場との協議が重ねられてきたという。一方では、教会は近年の島内人口の減少と信徒の高齢化に伴う施設維持管理の問題も抱えており、教会と地域社会との間には相互扶助的な関係性が構築されつつあるとの状況も語られた。

聞き取り後は、現教会に隣接する旧鯛ノ浦教会内の



2025.9.2 カトリック鯛ノ浦教会

見学を行った。旧鯛ノ浦教会は1903年に設立され、教会の鐘塔には旧浦上教会の被爆煉瓦が使用されたといわれている。また旧教会には聖典注解書をはじめ、歴代の司祭が活用したとされる多言語の聖書や布教資料が所蔵されていた。現在は図書館としても利用され、信徒の信仰教育の場としても活用されている。

鯛ノ浦から北西に移動する途中で中ノ浦教会、若松大浦教会、桐教会を巡検した。

中ノ浦教会は1925年の建立で、入江の景観に調和する立地が印象的である。内部は折上天井とリブ・ヴォールト天井を併用し、簡素ながら工夫を凝らした造りとなっている。当地の信徒は寛政年間に黒崎から移住した人々の子孫であり、明治初頭の「五島崩れ」と呼ばれる迫害を経験した歴史をもつ。そのため、この教会には「五島で一番美しい聖堂を造りたい」という信徒の願いが込められている。

若松大浦教会は1926年の創立で、当初は民家を聖堂として使用した。現在の聖堂は民家風の外観を保ちつつ、内部には地元で制作された、「五島に根づいた母の顔」を表している聖母像が安置されており、地域の信仰を象徴している。信徒数は少ないが、堂内外は丁寧に管理されており、深い信仰を感じさせる。

桐教会は1897年パリ外国宣教会のフューゼ神父によって設立された中五島最初の小教区である。1958年に現在の聖堂が建てられ、境内にはガスパル与作ら信仰指導者を顕彰する碑が建てられている。与作は1877年に自宅を仮教会として使用し、伝道学校を開設するなど布教と教育に大きな役割を果たした。

2日目の午後は、上五島町奈良尾郷にある真宗大谷派・虎屋山真宗寺を訪れ、住職・山本翔氏に聞き取り調査を行った。山本氏は資料を用いながら奈良尾における真宗の歴史を説明した。山本氏によれば、奈良尾は紀州から渡来した漁民によって漁業が盛んになった町であり、その漁民の多くは真宗門徒であったと考えられる。明治時代になると真宗寺院建立の機運が高まり、1879年に奈良尾説教所が開設された。その後、村民が村議会議員選挙並びに網代の問題をめぐり二派に分かれて対立し、改宗問題へと発展、最終的に一方が真宗に、もう一方が古くから当地に根づく曹洞宗に再編成された。奈良尾説教所は1940年頃に奈良尾教会となり、1995年には寺号を獲得した。山本氏はその二代目住職にあたり、4年前に当地へ赴任して以来、門徒や地域住民との関係構築に努めている。近隣の曹洞宗寺院とは、地域墓地に建てられた先覚者慰霊碑や魚族供養塔での供養を共に行うなど、宗派を超えた協力を行っている。奈良尾には真宗の教義にはなじまない習俗も根付いているが、山本氏は地域の営みを尊重

しつつ、門徒との関わりを大切にしている。奈良尾はかつて巻き網漁業が盛んだったが、現在は高齢化が進行し、門徒の多くも高齢者であるため、寺院の将来継続を見据えて納骨堂の建立を計画し、門徒と意見交換を進めている。また、一寺院のみでは難しい取り組みについては、島内の真宗寺院と連携する可能性を模索している。さらに山本氏からは、奈良尾の北西に位置する桐古里郷に残るかくれキリタンへの取材内容についても詳細な説明があった。こうした山本氏の語りからは、地域の歴史、文化、習俗を踏まえつつ、寺院の未来を構想しようとする姿勢がうかがえた。



2025.9.2 真宗寺

3日目である9月3日(水)は、真宗大谷派信行寺住職・清原昌也氏の案内のもと真宗大谷派・長崎教会、日本二十六聖人記念館、萬行寺、垣内キリタン墓地、遠藤周作文学館、長崎市外海歴史民俗資料館、ド・ロ神父記念館、旧出津救助院、枯松神社を巡検した。

真宗大谷派・長崎教会境内地内には「非核非戦」の碑があり、その下に原爆によって亡くなられた身元不明のお骨が安置されている。



2025.9.3 長崎教会

日本二十六聖人記念館は1962年に開館し、西坂の殉教地に立地している。当館はフランシスコ・ザビエルに始まる日本とヨーロッパの出会いから生まれたキリシタン文化と、迫害によって殉教した人々の歴史を紹介する施設である。記念館がある西坂は、1597年から17世紀中頃にかけて多くのキリスト教徒が殉教した地である。

垣内キリシタン墓地は、三重地区（長崎市三重町）の山間に入った所にある。かつての住民は全員がキリシタンであり、墓碑が現地に残存している。1952年の調査で22世帯が確認され、禁教期においても比較的緩やかな統制と地理的隔絶により、信仰を保つことができたと考えられる。

遠藤周作文学館が立地する長崎市外海地区は、キリシタンの里としても知られており、遠藤周作の文学の原点とされる小説『沈黙』の舞台となった場所である。

長崎市外海歴史民俗資料館は1979年に開館し、外海地区における歴史・民俗・文化に関して、多くの展示活動を行っている。長崎市外海地区には、先史時代の遺跡、中世における神浦氏の活動、近世の大村・佐賀両藩支配下で形成されたキリシタンの独自の歴史や文化など、多様で貴重な遺産が残されている。

ド・ロ神父記念館は1968年に開館し、旧出津救助院とともにフランス人宣教師ド・ロ神父の活動を顕彰している。神父は1879年に赴任して以来、教育、福祉、土木、産業など幅広い分野に貢献した。記念館建物は1885年築の鯛網工場を転用したもので、木骨煉瓦造に洋小屋組を架ける明治期の独特な建築である。館内には宗教資料や医療器具、産業用具などが収蔵されている。

旧出津救助院は1883年に設立された女性自立支援施設であり、織物や食品加工を指導する授産場や工場を備えていた。隣接する石積み「ド・ロ壁」とともに保存され、現在は施設の一部が国の重要文化財に指定されている。また、訪問の際には、シスターから救助院施設の設立の背景及び当時の活動の概要について説明を受けた。

最後に訪問した枯松神社は黒崎教会近くの丘陵に位置し、潜伏期に活動したサン・ジワン神父を祀る。周辺には板石を伏せたキリシタン墓が点在し、潜伏キリシタン信仰の痕跡を今に伝えている。

3日間の共同調査を通して、2024年度に共同調査を実施した平戸・生月地区とは異なる当該地区における諸宗教の様相に触れるとともに、カトリック教会や大谷派寺院が直面している課題についても現場の声を伺うことができた。お忙しいなか調査にご協力いただいた関係各氏に記して感謝申し上げます。東京分室で

は、今年度中に長崎での2回目の共同調査の実施を予定している。引き続き考察を深めていきたい。

参考文献

- 日本カトリック司教協議会諸宗教部門『カトリック教会の諸宗教対話の手引き実践 Q & A』カトリック中央協議会、2009年
- カトリック長崎大司教区長崎地区カテキスタ養成委員会『まるちれすー子どものための教会史・長崎一』カトリック長崎大司教区、1998年
- 長崎文献社編集・カトリック長崎大司教区監修『長崎遊学2長崎・天草の教会と巡礼地完全ガイド』長崎文献社、2023年（2005年初版）

岐阜県大垣市揖斐川町及び池田町での聞き取り調査 (9月12日～13日)

一般研究 (木越康班) 研究代表者・教授 木越 康

岐阜県大垣市の揖斐川町春日地区及び池田町において、聞き取り調査を行った。本研究班は、2017 年以来継続して過疎地域の宗教意識調査を行っている。特に 2020 年度から 2024 年度にかけては科研基盤研究 (C) として調査を進めてきたが、今回の聞き取りは 2024 年 12 月末に行ったインターネットを利用した大規模アンケート調査で得られた協力者に対して実施したものである。

日本の伝統的地域コミュニティでは、寺院や神社などの宗教施設が長くコミュニティ活動の中心的な役割を果たし、住民の精神文化を支える柱となってきた。しかし近年の少子化と都市圏への人口集中によってコミュニティは解体の危機に瀕し、これらの宗教伝統も存続の危機に直面している。本研究は 2024 年度までの研究を継続して、伝統宗教の未来継承について総合的に研究することを狙ったものであるが、今回の聞き取りもその一環として行われたものである。

研究班はこれまで長く、揖斐川町春日地区での調査を行ってきたが、2025 年度の本研究では、基本的には当該地区より転出した「他出子」に対する聞き取りをメインに置く。春日地区では現在高齢化が進み、多くの中老年層は、早くに地区外に転出している。高校進学時や就職の際に地区を出る住民が多いが、中には現在も春日地区に親や親族、家屋や畑などを残す方々がおられ、時おり地区に帰省する。本研究はそれら他出子に焦点を絞って、宗教的風土の継承に関する調査を行っている。

既述の大規模アンケート調査は、春日地区の近隣住宅地である池田町住民を対象に行ったものである。2017 年度の研究開始時から協力を仰ぐ池田町の真宗寺院住職に依頼し、同寺院が池田町内に運営する幼稚園・保育園の保護者に対して行った。具体的には「学校法人野々村学園／コスモ幼稚園」および「社会福祉法人市橋保育園」の協力もとで、計 3 園の保護者の方々に協力を仰いだ。そこで特に春日地区からの他出子やその関係者を探し、追加調査への協力を依頼した。これまですでに 1 名から聞き取りを行ったが、今回は他に 4 名の方から聞き取りを行った。

今回の調査の内、1 名は藤元雅文研究員が、12 日

午前中に ZOOM を使って学内から聞き取りを行った。協力者は特に春日地区との関連はないが、ご自身が真宗門徒であるため、過疎地域の信仰研究に関心があったりして協力を申し出てくださいました方である。他の 3 名については木越および藤枝真研究員が、現地に赴いて直接対面で聞き取りを行った。はじめに池田町内で待ち合わせをした協力者 (聞き取りの最初の 1 名。昨年度に聞き取り調査済みであり、今回は紹介者。) と共に春日地区に入り、下ヶ流 (しもがれ) に在住の紹介者の義父及びその知人 2 名に聞き取りを行った。公民館を使用して行われた聞き取りは予定を超えて 2 時間以上にも及んだが、これまでの聞き取りのひな型に沿って、宗教的風土を中心に、①地区での過去の思い出、②現状、③未来に関する不安内容を聞き取った。①の過去については、住民が多くいた頃は寺院も祭りごとにも多くの参詣者や参加者があり活気に満ちていたことを嬉々として語られたが、②の現状については、住民の多くが転出し、地区にはほとんど子どもがいない様子が語られた。したがって③の宗教的風土の未来継承に関しても、特に仏教寺院への関わりが次第に衰退する様子が語られ、神社での行事や伝統的「踊り」を中心とした祭りも、地域住民だけでは維持困難となっている状況が話された。しかし特に印象的であったのは、祭りごとに関しては、現在も、地区を離れた他出子やその関係者の参加があり、何とか維持しているということであった。この地区の祭りには、男子と女子それぞれに役割を持つ特徴的な踊りが伝わるが、双方とも現在は地域外の子どもの参加によってなんとか維持しているとのことであった。地域住民からすれば、子ども世代から孫世代へと参加者は移行しているが、すでに地域を離れたこれらの人々も踊りなどの行事には参加するとのことであった。



聞き取りの様子

このような宗教的風土の現状については、池田町に戻って行われた今一人の協力者への聞き取りでも語られた内容である。寺院を中心とした仏教行事に関しては、地区を離れた住民が地域寺院に参詣し仏教行事に参加する様子は聞かれなかったが、神社の守りや踊りなどの祭りごとに関しては、なんとか関係を維持している状況であった。

2017年にはじまった当研究は、真宗の信仰に篤い地域を選んで行われたものであったが、今回の調査の結果は、特に真宗をはじめとする仏教信仰の未来については厳しい声であったと言える。寺院参詣など仏教信仰が、家単位や個を単位として行われるものであり、寺院維持の責任も、多くの部分が寺族に負われるものであるのに対して、祭りごとは地域住民全体の関わりのもとで実施されてきた宗教的風土である。したがって継承に関しては、特に後者は他出子も含めた地域関係住民が全体で工夫して方途を模索するが、仏教的伝統の存続に向けた基盤は、それに対して著しく脆弱であるということが今回の聞き取りから感じられた。

歎異抄ワークショップ開催報告(2025.4.1~2025.9.30)

第 15 回 『歎異抄』 翻訳研究ワークショップ開催報告

国際仏教研究 庶務・准教授 マイケル・コンウェイ
 博士後期課程真宗学専攻第一学年 国際仏教研究 研究補助員 山名 大河
 修士課程真宗学専攻第二学年 高松 英照

2017 年から本学の真宗総合研究所・龍谷大学世界仏教文化研究センター・カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所の三者協定に基づいて、江戸時代に作られた『歎異抄』の注釈書の英訳作業を中心としたプロジェクトを推進してきた。6 月 27 日(金)から 29 日(日)にかけて、本学の響流館 3 階の施設および慶聞館 4 階のマルチスペースを会場に、第 15 回『歎異抄』翻訳研究ワークショップを開催した。

前回、本学を会場にワークショップを開催したのは、パンデミックが終息しつつあった 2022 年 8 月だったので、約 3 年ぶりに主催することになった。

今回のワークショップは、以前の開催時と同様に三つの作業部会に別れて、『歎異抄』注釈書を英訳し、その翻訳について議論をした。マーク・ブラム(嘱託研究員・カリフォルニア大学バークレー校教授)は、円智の『歎異抄私記』を翻訳する部会の責任者を務め、嵩満也(龍谷大学教授)は寿国の『歎異抄可笑記』、報告者のコンウェイは深励の『歎異抄講林記』の翻訳部会の責任者を務めた。三日間の作業を通して、第 18 条に対する注釈の翻訳を終えた。『歎異抄』の後序に対する注釈の英訳作業のみが残っているので、今回のワークショップは、本学主催の最後のワークショッ

プになる。

27 日の朝に全ての参加者がメディアホールに集まり、報告者が、開催趣旨および今までの作業の概略を説明した上で、各部会において翻訳作業が進められている注釈書の著者に関して簡単に紹介した。その後、作業部会に別れて、作業を進ませ、29 日の午後に再びメディアホールに全体で集まり、各部会の責任者から作業内容に関する報告を聞き、議論した。また 27 日と 29 日の夕方、作業終了後に慶聞館 4 階のマルチスペースにて参加者が研究交流できる懇談会を開催した。

本プロジェクトの重要な目的の一つは、国際的な場で活躍できる次世代の真宗学の研究者を育成することにあるので、上記の開催報告に加えて、参加した 2 名の大学院生の参加報告を下記に紹介する。

本年度から国際仏教研究の研究補助員として勤めている山名大河の報告は次の通りである。

今回のワークショップは 6/27 から 3 日間、大谷大学を会場として行われた。『歎異抄』の該当箇所は第 18 条と後序であった。

私は、国際仏教研究班の RA として、前日までの準備をコンウェイ先生と真宗総合研究所の方々とは協力して行い、ワークショップには 3 日間参加をした。私自身、今回のワークショップ参加は 2 回目であった。前回はバークレーにおいて 3 月に行われ、初めて英語の議論の場に参加させていただいた。前回同様、江戸講義録である、円智『歎異抄私記』と深励『歎異抄講林記』、寿国『歎異抄可笑記』の三本の英訳が行われた。

私は円智班を中心に参加をした。コンウェイ先生の英訳された『歎異抄』をまず読み、そこから、円智『歎異抄私記』の該当箇所を読み、一からその英訳を作成していく流れが進められた。例えば、版本には存在する「言未生怨者」から始まる漢文の文章は『歎異抄』には存在せず、『歎異抄私記』のみに存在する。おそらくは『涅槃経』からの文であるが円智がどこから引き、なぜ書き記したのか不明であった。講義内容



報告会の様子

とは直接には関係しないであろうと判断して、ここでは英訳しない判断を行った。今回の英訳の作業において、一番疑問に感じ、時間を要した箇所は、「施入物の多少について、信の浅深を定め、往生已後、大小仏になるといへる妄説を破せらるるなり」の箇所である。まず、英訳に入る前に、円智の講義内容そのものの理解に苦しんだ。また、英訳する際も、「施入物」とは？「大小仏」とは？「妄説」をどう訳すか？など、江戸時代の講義録に頻出する用語の訳し方の共通方針を再確認する必要があることも感じた。

最終日の討論会においては、円智班、深励班、寿国班の3班の英訳の報告がなされ、それぞれの英訳の重要点が共有された。

今回のワークショップを通して感じたことは、前回はそうであるが、英語の議論に参加することの難しさである。私自身、議論を聞き取るので精一杯であり、スピーキングを用いての議論や、英訳の推敲に加わることが難しかった。そのため、英語をより身近に身につける必要がある。また、私自身の研究において『歎異抄』や江戸期の講義録をこれまで扱ってこなかったため、研究の必要性を痛感し、これまでのワークショップで英訳されてきた『歎異抄』やその講義録の英訳の復習をワークショップ終了後から行っている。最後に、今回のワークショップでは、大谷大学大学院生は私を含め2名のみであったのが少し残念であった。

ワークショップは来年3月のバークレーと6月の龍谷大学での開催で目処はつきそうなので、残り少ないではあるが、積極的に参加して、江戸期の『歎異抄』理解と、英訳される過程で、どのように真宗の教えを『歎異抄』から受け止めていくのかを追っていきたいと思っている。

修士課程に在籍している高松英照の参加報告は次の通りである。

2025年6月27日から29日の三日間、大谷大学で第15回歎異抄WSが開催された。そこで、江戸期の『歎異抄』の注釈書の英訳が行われた。私は今回二回目の参加であり、WSでの交流の大切さと議論の難しさなど身に染みて感じたことが多くあった。以下に今回の活動報告を行う。

今回、歎異抄WSの参加校はカリフォルニア大学バークレー校と龍谷大学、大谷大学の三校である。そして作業班は三つ、円智の『歎異抄私記』をもとに翻訳が行われたマーク・ブラム先生の班、寿国の『歎異抄可笑記』をもとに行った嵩先生の龍谷班、深励の『歎異抄講林記』をもとに行われたコンウェイ先生の大谷班である。今回は『歎異抄』第18章からのスタートであった。また、台湾からや本学海外研修員の方

など初めてお会いする参加者も多かった。

私は3日間のWSで一日目はコンウェイ先生の班に参加し、残り2日はブラム先生の班に参加した。コンウェイ先生の班では先生の翻訳をもとに『歎異抄講林記』における理解の難しい箇所や参加者の質問を通して行われる議論が活発であった。

ブラム先生の班では円智の書における古典表現や解説の構成が複雑な箇所があり、その表現や解説の背景などを踏まえた議論を通して、どのような言葉で翻訳するのかについて検討が行われた。

二つの班に参加し、様々な学びがあった。まず、本願を意味する「vow」を四十八願という観点を大切にするために「vows」と複数型にすべきであるという見解や「方便」や「思度計なき」など、英語では言葉がないものを文脈や著者の意図とずれないように丁寧に確認して言葉を決定しなければならないことなど、参加によって気づくことが多くあった。

今回は三月にカリフォルニア大学バークレー校で歎異抄WSが開催される。このWSでしか交流できない先生や参加者の方々があり、英語による日常会話や議論は困難であるが、そこでの学びは唯一無二であるため、頑張って参加したい。

以上の2名の報告から、本プロジェクトが参加した大学院生にとって刺激となり、彼らの学びに資することが伺われる。翻訳作業が終盤に入っているので、ワークショップの開催回数は残り僅かとなったが、その後の成果出版に向けて、研究協力者の間で調整を進め、成果の公開のために作業の分担や、公開の形態について合意し、2026年度中に詳細な計画を立てる必要があるので、ワークショップ開催という形でのプロジェクトの推進が終わっても、成果の公開まで更に種々の作業が必要となる。

大阪・関西万博インド館展示への仏教写本研究の協力等について

大阪・関西万博インド館展示協力

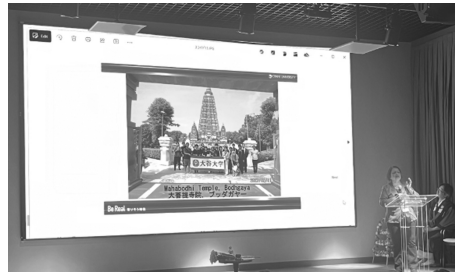
真宗総合研究所事務局

大谷大学真宗総合研究所仏教写本研究は、2025年4月13日(日)より大阪・夢洲で開催された大阪・関西万博インド館における展示(5月1日(木)～10月13日(月))に協力し、仏教に関する専門知識、及び大谷大学博物館所蔵貝葉写本画像データの提供を行いました。

さらに期間中の5月12日(月)に大阪・関西万博インド館で開催された“Buddha Poornima Celebrations at India Pavilion”(仏陀の誕生・成道・入滅を記念する特別イベント)で仏教写本研究研究代表者のダシュ教授が講演を行い、菩提樹展示における展示説明を行いました。



インド館入口に展示された悟りの樹(菩提樹)



インド館での講演の様子



複数の文字での仏教伝播を表現するため大谷大学博物館が所蔵する写本を展示



ブツダの金言に触れる展示
(複数の文字を使用したパーリ語表記・日本語表記・英語表記)



ダシュ教授による菩提樹展示の説明(2枚)

後日、本学の学生も展示の見学に訪れました。



また、これらに関連して7月26日(土)に生涯学習講座大阪・関西万博連携記念特別企画として「ブッダの教えの旅一口伝から文字へと広がったグローバルな知恵」と題したダシュ教授による講演、9月21日(日)に貝葉写本作成のワークショップを開催しました。(いずれも在大阪・神戸インド総領事館及びインド文化省のIndira Gandhi National Centre for the Artsとの共催)

講演の中で、ダシュ教授は「ブッダの教えの旅」をテーマに、仏教伝播に使われた写本の魅力や、世界に広まったブッダの智慧とその受容に迫りました。また、貝葉写本に丸い文字が使用されている理由として、ヤシの葉に鉄筆で直線を刻むよりも曲線を刻むほうが負担・劣化が少なくなることが紹介されました。



ダシュ教授による講演

写本作成のワークショップでは、ブッダの言葉に触れながら、実際のヤシの葉と鉄筆を用いて、参加者が自分だけの写本を作成しました。



写本を作成する参加者の様子

生涯学習講座
大阪・関西万博インド館
連携記念特別企画
ブッダの教えの旅
一口伝から文字へと広がったグローバルな知恵

開演日時: 2025年 7/26 (土)
10:30~12:00

開催形式: 対面講座
開催場所: 楽間館1階 K101教室
料 金: 無料(申込不要)
定 員: 100名※先着順

講師: ダシュ ショバ ラニ 大谷大学 教授

本ワークショップでは、ブッダの教えに触れながら、実際のヤシの葉と鉄筆を使って、参加者が自分だけの写本を作成します。インドの古代筆記文化を体験しながら、ブッダの教えを体験できる貴重な機会です。お申し込みの是非をお待ちしております。

申込期間: 7/10(日)~7/19(日)
申込方法: 申込フォームをダウンロードしお申し込みください。
申込先: 申込フォームをダウンロードしてください。

お問い合わせ: 075-411-3043
申込先: 075-411-3043



完成した写本を手に持って記念撮影

なお今回仏教写本研究が協力した大阪・関西万博インド館には期間中に3,730,096人の来場者があり、多くの方々に本学の研究の一端に触れていただくことができました。

イベント告知ポスター

真宗総合研究所彙報 2025. 4. 1 ~ 2025. 9. 30

■研究所関係

◇研究所委員会

日 時：2025年6月6日14：40～15：40

場 所：響流館4階 会議室

- 内 容：1. 特別研究員について
2. 一般研究（予備研究）について【報告】
3. 一般研究の発足について
4. 『研究紀要』ガイドラインについて
5. その他

日 時：2025年6月6日～12日

場 所：サイボウズによる書面会議

- 内 容：1. 指定研究 研究組織の変更について

日 時：2025年9月5日16：00～17：00

場 所：響流館4階 会議室

- 内 容：1. 特別研究員について
2. 一般研究の発足について
3. 一般研究（予備研究）の募集について
4. PD研究員の募集について
5. 客員研究員について
6. 『真宗総合研究所研究紀要』査読・校
 閲依頼について
7. その他

◇2024年度「特定・指定研究」「資料室」研究成果報告会

日 時：2025年5月28日16：30～19：20

場 所：響流館3階メディアホール

■特定研究「大谷大学樹立の精神」100年

【研究会】

日 時：4月7日16：30～18：00

出席者：一楽真 西本祐攝 戸次顕彰 巖城大空

場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：4月14日16：30～18：00

出席者：一楽真 西本祐攝 大艸啓 戸次顕彰 巖城大空

場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：4月21日16：30～18：00

出席者：西本祐攝 戸次顕彰 巖城大空

場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：4月28日16：30～18：00

出席者：一楽真 西本祐攝 戸次顕彰 巖城大空

場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：5月12日16：30～18：00

出席者：一楽真 西本祐攝 巖城大空

場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：5月26日16：30～18：00

出席者：一楽真 西本祐攝 巖城大空

場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：6月2日16：30～18：00

出席者：一楽真 大艸啓 戸次顕彰 巖城大空

場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：6月16日16：30～18：00

出席者：一楽真 大艸啓 戸次顕彰 巖城大空

場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：6月30日16：30～18：00

出席者：一楽真 大艸啓 戸次顕彰 西本祐攝 巖城大空

場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：7月7日16：30～18：00

出席者：一楽真 大艸啓 戸次顕彰 西本祐攝 巖城大空

場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：7月14日16：30～18：00

出席者：一楽真 戸次顕彰 西本祐攝 巖城大空

場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

参加者：木越康、Michael J. Conway、山名大河

日 時：8月25日13:00~14:00

出席者：一楽真 大艸啓 戸次顕彰 西本祐攝 巖城大空

場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容：公開研究会開催に向けた打ち合わせ

◇第三回『歎異抄』ワークショップ打ち合わせ

日 時：2025.6.26 4限目(14時40分~16時10分)

場 所：真宗総合研究所 ミーティングルーム(響流館4階)

参加者：木越康、Michael J. Conway、山名大河

日 時：9月1日16:30~17:30

出席者：一楽真 戸次顕彰 西本祐攝 巖城大空

場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容：公開研究会開催に向けた打ち合わせ

■EBS(東方仏教徒協会)

◇EBS公開セミナー

日 時：2025年4月21日14:40~16:10

場 所：響流館4階会議室

講 師：Michael J. Conway

日 時：9月22日16:30~17:30

出席者：一楽真 大艸啓 西本祐攝 巖城大空

場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容：公開研究会開催に向けた打ち合わせ

日 時：2025年5月26日14:40~16:10

場 所：響流館4階会議室

講 師：Michael J. Conway

日 時：9月30日16:30~17:30

出席者：一楽真 大艸啓 戸次顕彰 西本祐攝 巖城大空

場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容：公開研究会開催に向けた打ち合わせ

日 時：2025年6月23日14:40~16:10

場 所：響流館4階会議室

講 師：Michael J. Conway

■国際仏教研究

【会議】

◇第一回『歎異抄』ワークショップ打ち合わせ

日 時：2025.4.23 4限目(14時40分~16時10分)

場 所：真宗総合研究所 ミーティングルーム(響流館4階)

参加者：木越康、アマ・ミチヒロ、Michael J. Conway、山名大河

日 時：2025年7月21日14:40~16:10

場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム

講 師：Michael J. Conway

日 時：2025年9月29日14:40~16:10

場 所：響流館4階会議室

講 師：Michael J. Conway

◇第一回「国際仏教研究班全体会議」

日 時：2025.4.24 4限目(14時40分~16時10分)

場 所：真宗総合研究所 ミーティングルーム(響流館4階)

参加者：木越康、Michael J. Conway、新田智通、山名大河

◇EBS編集委員会

日 時：2025年5月7日16:30~

場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム(Zoom)

出席者：Robert F. Rohdes、John S. LoBleglio、新田智通、Michael J. Conway、Ama Michihiro、山内美智、筑田一毅、加藤淳、安井明子、藤枝直子

日 時：2025年7月15日16:30~

場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム(Zoom)

出席者：Robert F. Rohdes、John S. LoBleglio、新田智通、Michael J. Conway、Ama Michihiro、David White、山内美智、筑田一毅、加藤淳、安井明子、藤枝直子

◇第二回『歎異抄』ワークショップ打ち合わせ

日 時：2025.6.12 4限目(14時40分~16時10分)

場 所：真宗総合研究所 ミーティングルーム(響流館4階)

◇EBS 編集会議

日 時：2025 年 6 月 9 日 16：30～
場 所：EBS 事務局 (Teams)
出席者：Robert F. Rohdes、John S. LoBreglio、
新田智通、Michael J. Conway、
Ama Michihiro、藤枝直子

日 時：2025 年 9 月 25 日 16：20～17：50
場 所：EBS 事務局 (Teams)
出席者：Robert F. Rohdes、John S. LoBreglio、
新田智通、Michael J. Conway、
Ama Michihiro、藤枝直子

■東アジア・北アジア仏教研究

【ミーティング・情報交換】

◇第 1 回

日 時：2025 年 7 月 23 日 16：30～20：00
出席者：松川節、井黒忍、松浦典弘、箕浦暁雄、
宗周太郎 (大谷大学)
場 所：真宗総合研究所
内 容：大谷大学博物館所蔵敦煌文献の研究展望

◇第 2 回

日 時：2025 年 8 月 19 日 14：00～16：00
出席者：松浦典弘 (大谷大学)、張湧泉 (浙江大学
教授)、高田時雄 (京都大学名誉教授)
場 所：真宗総合研究所
内 容：敦煌文献研究の現状と本学所蔵の敦煌写経
について

■大学史研究

【出張】

◇2025 年 5 月 19 日

出張先：近畿大学
要 務：全国大学史資料協議会参加
出張者：采翠晃

■仏教写本研究

【ドイツ・ハイデルベルク大学との共同研究プロジェクト公開研究発表会】

◇第 26 回

日 時：2025 年 5 月 23 日
発 表 者：Dr. Charles Li (Universität Hamburg)
会 場：オンライン (Zoom)
発表題名：From Manuscripts to Networks

◇第 27 回

日 時：2025 年 6 月 20 日
発 表 者：Udaya Kumar P.L. (Honorary Project
Director, Bengaluru Inscriptions 3D
Digital Conservation Project Mythic
Society)
会 場：オンライン (Zoom)
発表題名：Digitally Conserving Bengaluru's Stone
Inscriptions: Technology, Data, and
Public History (How 3D Scanning, Data
Science, and Citizen Collaboration are
Reshaping Epigraphy) (1)

◇第 28 回

日 時：2025 年 6 月 27 日
発 表 者：Udaya Kumar P.L. (Honorary Project
Director, Bengaluru Inscriptions 3D
Digital Conservation Project Mythic
Society)
会 場：オンライン (Zoom)
発表題名：Digitally Conserving Bengaluru's Stone
Inscriptions: Technology, Data, and
Public History (How 3D Scanning, Data
Science, and Citizen Collaboration are
Reshaping Epigraphy) (2)

【国内出張】

◇第 1 回

日 時：2025 年 4 月 12 日
出張先：夢洲 (大阪)
出張者：Shobha Rani Dash (本班研究代表者)
筑田一毅 (大谷大学教育研究支援課)
中島晶子 (大谷大学教育研究支援課)
加藤淳 (大谷大学教育研究支援課)
要 務：大阪万博インド館における写本展示の確認
作業

◇第 2 回

日 時：2025 年 5 月 12 日
出張先：夢洲 (大阪)
出張者：Shobha Rani Dash (本班研究員・代表者)
筑田一毅 (大谷大学教育研究支援課)
加藤淳 (大谷大学教育研究支援課)
要 務：大阪万博インド館における写本展示説明・
講演

【公開講演会・ワークショップ】

◇第1回

日 時：2025年7月26日 10：30-12：00
発表者：Shobha Rani Dash（本班研究代表者）
会 場：大谷大学
講演題名：ブッダの教えの旅—口伝から文字へと広がったグローバルな知恵—

◇第2回

日 時：2025年9月21日
クラス① 10：30～12：00
クラス② 13：00～14：30
担当者：Shobha Rani Dash（本班研究代表者）
会 場：大谷大学
内 容：貝葉写本作成ワークショップ

【ミーティング・情報交換】

◇第1回

日 時：2025年4月4日 15：00～17：00
出席者：Shobha Rani Dash（本班研究代表者）
Dr. Anand Mishra（Heidelberg University、
本班嘱託研究員）
宇野ヒカル（本班研究補助者）
岡圭介、加藤淳（大谷大学教育研究支援課）
場 所：オンライン（Zoom）
内 容：目録データベース構築・公開作業

◇第2回

日 時：2025年6月2日 15：30～16：30
出席者：Shobha Rani Dash（本班研究代表者）
Dr. Suchada Srisetthaworakul（Mahidol
University、本班嘱託研究員）
場 所：オンライン（Zoom）
内 容：Diplomatic Edition テキストの確認作業

◇第3回

日 時：2025年6月27日 9：30～12：30
出席者：Shobha Rani Dash（本班研究代表者）
柏原信行（本班嘱託研究員）
場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム
内 容：ローマ字転写テキストの写本選定に関する
打ち合わせ

■宗教・社会研究

【国内出張】

◇2025年8月31日～9月3日

出張先：長崎県長崎市・新上五島町（カトリック鯛
ノ浦教会、憶念寺、真宗寺、頭ヶ島天主堂、
旧出津救助院、長崎教会他）
要 務：共同研究テーマ「宗教と社会の関係をめぐる
総合的研究—社会的なものとしての宗教
—」に関わる調査の実施
出張者：後藤晴子、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央、
繆寿楽

【公開研究会】

◇被傷性への感受性—宗教研究者の戦争体験を踏まえて—

日 時：2025年6月30日
場 所：親鸞仏教センター 3階会議室
講演者：西村明（東京大学大学院人文社会系研究科
教授）
出席者：後藤晴子、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央、
繆寿楽

【ミーティング】

◇第1回

日 時：2025年4月7日 13：00～17：00
場 所：真宗総合研究所東京分室
出席者：後藤晴子、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央、
繆寿楽
内 容：指定研究の研究計画に関する打合せ、室内
研究会の実施

◇第2回

日 時：2025年4月21日 13：00～17：00
場 所：真宗総合研究所東京分室
出席者：後藤晴子、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央、
繆寿楽
内 容：所報原稿の確認、公開研究会及び共同調査
の進捗に関する打合せ

◇第3回

日 時：2025年5月12日 13：00～17：00
場 所：真宗総合研究所東京分室
出席者：後藤晴子、高橋泉、藤井麻央、繆寿楽
内 容：所報原稿の確認、公開研究会及び共同調査
に関する打合せ

◇第4回

日 時：2025年5月26日10：30～16：00

場 所：真宗総合研究所東京分室

出席者：後藤晴子、高橋泉、藤井麻央、繆寿楽

内 容：公開研究会及び共同調査に関する打合せ

出席者：後藤晴子、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央、繆寿楽
内 容：所報原稿の検討、三研究所若手研究員合同研究会に関する打合せ

◇第5回

日 時：2025年6月9日10：30～16：00

場 所：真宗総合研究所東京分室

出席者：後藤晴子、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央、繆寿楽

内 容：公開研究会に関する打合せ、公開研究会に関する事前勉強会、共同調査に関する打合せ

個人研究 高橋泉班

【学会発表・研究会参加】

◇「宗教と社会」学会第32回学術大会

日 時：5月31日～6月1日

場 所：北海道大学札幌キャンパス

要 務：学会参加、研究発表

出席者：高橋泉

◇第6回

日 時：2025年6月23日13：00～17：00

場 所：真宗総合研究所東京分室

出席者：後藤晴子、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央、繆寿楽

内 容：公開研究会に関する打合せ、公開研究会に関する事前勉強会、共同調査に関する打合せ

◇2025年度第1回外国人支援研究会

日 時：6月3日

場 所：星槎大学大学院横浜キャンパス

要 務：研究会参加、研究発表

出席者：高橋泉

◇異文化間教育学会第46回大会

日 時：6月22日

場 所：東京大学本郷キャンパス

要 務：学会参加、研究発表

出席者：高橋泉

◇第7回

日 時：2025年7月14日13：00～14：00

場 所：真宗総合研究所東京分室+オンライン

出席者：後藤晴子、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央、繆寿楽

内 容：共同調査に関する打合せ

◇日本オーラル・ヒストリー学会第23回大会

日 時：9月13日～14日

場 所：大阪大学豊中キャンパス

要 務：学会参加、研究発表

出席者：高橋泉

◇第8回

日 時：2025年7月28日13：00～17：00

場 所：真宗総合研究所東京分室

出席者：後藤晴子、高橋泉、藤井麻央、繆寿楽

内 容：共同調査に関する打合せ及び事前勉強会の実施

【国外出張】

◇2025年7月20日

出張先：大韓民国ソウル特別市内

要 務：Y教会・O教会活動調査、資料収集

出張者：高橋泉

【国内出張】

◇2025年5月11日

出張先：JICA 国際会議場

要 務：ベトナム難民来日50周年記念会参加

出張者：高橋泉

◇第9回

日 時：2025年8月25日13：00～17：00

場 所：真宗総合研究所東京分室

出席者：後藤晴子、高橋泉、藤井麻央、繆寿楽

内 容：共同調査に関する打合せ及び勉強会の実施

◇2025年8月21日

出張先：愛知県名古屋市内

要 務：N教会活動調査、資料収集

出張者：高橋泉

◇第10回

日 時：2025年9月22日13：00～17：00

場 所：真宗総合研究所東京分室

◇2025年9月15日
出張先：神奈川県横浜市内
要 務：横浜都市発展記念館企画展参加、資料収集
出張者：高橋泉

個人研究 藤井麻央班

【学会発表・研究会参加】

◇第33回日本近代仏教史研究会
日 時：2025年5月24日
場 所：京都大学
要 務：学会参加
出席者：藤井麻央

◇「宗教と社会」学会第32回学術大会
日 時：2025年5月31日～6月1日
場 所：北海道大学
要 務：学会参加、研究発表
出席者：藤井麻央

◇第64回教学研究会
日 時：2025年6月20日
場 所：金光北ウイングやつなみホール
要 務：研究会参加
出席者：藤井麻央

◇第7回現代と親鸞公開シンポジウム
日 時：2025年6月28日
場 所：オンライン
要 務：公開研究会参加
出席者：藤井麻央

◇オンライン大学院
日 時：2025年8月1日
場 所：オンライン
要 務：研究発表
出席者：藤井麻央

◇第84回日本宗教学会
日 時：2025年9月15日～16日
場 所：上智大学
要 務：学会参加、研究発表
出席者：藤井麻央

【出張】

◇2025年7月22日～24日
出張先：金光図書館、毒ガス資料館、H教会他
要 務：資料調査、聞き取り調査

出張者：藤井麻央

◇2025年8月6日～8日
出張先：出雲大社教、北島国造館、島根県立図書館
要 務：施設見学、面談
出張者：藤井麻央

◇2025年8月18日
出張先：N宗
要 務：施設見学、面談
出張者：藤井麻央

個人研究 繆寿楽班

【学会発表・研究会参加】

◇中観派ワークショップ2025
日 時：2025年7月12日
場 所：大正大学 総合仏教学研究部
要 務：研究会参加
参加者：繆寿楽

◇第35回西日本インド学仏教学会学術大会
日 時：2025年7月25日～27日
場 所：広島大学東広島キャンパス
要 務：学会発表
参加者：繆寿楽

◇XXth IABS Congress（第20回国際仏教学会学術大会）
日 時：2025年8月9日～17日
場 所：ライプツヒ大学（ドイツ）
要 務：学会発表
参加者：繆寿楽

◇日本印度学仏教学会第76回学術大会
日 時：2025年9月4日～8日
場 所：大阪大学
要 務：学会発表
参加者：繆寿楽

◇日本仏教学会
日 時：2025年9月27日
場 所：武蔵野大学 有明キャンパス
要 務：研究会参加
参加者：繆寿楽

【公開研究会】

◇大乘仏教中の辟支仏 (訳: 大乘仏教における辟支仏)

日 時: 2025年8月29日

場 所: オンライン

講演者: 繆寿楽、白景皓

◇インド文学・論理学研究会

日 時: 2025年9月17日

場 所: 大谷大学真宗総合研究所東京分室

講演者: 矢崎長潤、繆寿楽

■一般研究 (木越康班) 【共同研究】

【研究会】

日 時: 6月19日 12:20~

場 所: 仏教教育センター分室

出席者: 木越康・藤枝真・藤元雅文

日 時: 7月10日 12:20~

場 所: 仏教教育センター分室

出席者: 木越康・藤枝真・藤元雅文

日 時: 7月31日 12:20~

場 所: 仏教教育センター分室

出席者: 木越康・藤枝真・藤元雅文

日 時: 9月10日 11:30~

場 所: 真宗総合研究所ミーティングルーム (ZOOM)

出席者: 木越康・藤枝真・藤元雅文・本林靖久

【出張】

日 時: 9月12日~13日

出張先: 岐阜県大垣市揖斐川町春日地区及び池田町

要 務: 聞き取り調査

出張者: 木越康・藤枝真・藤元雅文 (ZOOMによる学内からの聞き取り)

■一般研究 (田中正隆班) 【個人研究】

【海外出張】

日 時: 2025年7月31日~8月25日

出張先: ベナン共和国

要 務: 真総研予備研究のための現地調査

出張者: 田中正隆

■組織

□研究所委員会

鈴木 寿志 (研究・国際交流担当副学長、真宗総合研究所長)

箕浦 暁雄 (真宗総合研究所主事)

福島 栄寿 (大学院人文学研究科長)

山内 美智 (教育研究支援部事務部長)

筑田 一毅 (教育研究支援課長)

後藤 晴子 (准教授)

Michael J. Conway (准教授)

Dash Shobha Rani (教授)

戸次 顕彰 (准教授)

西尾 浩二 (准教授)

松川 節 (教授)

三宅 伸一郎 (教授)

■人事

真宗総合研究所長

(新) 鈴木 寿志 (旧) 廣川 智貴

(2025年4月1日付)

■東京分室 PD 研究

□新規採用 (2025年4月1日付)

* 繆 寿楽

□契約期間満了 (2025年3月31日付)

* 磯部 美紀

* 澤崎 瑞央

■特別研究員

□新規

(2025年4月1日付)

* 亀山 裕樹

現 職: 任期制助教

研究期間: 2024年4月1日~2026年3月31日

(科学研究費助成事業 特別研究員奨励費)

※研究活動スタート支援採択により2025年7月30日まで

研究課題: なぜ子どもがケアを担わざるをえないのかに関する検討—資源の不足に着目して

* 松田 祥平

現 職: 任期制助教

研究期間: 2025年4月1日~2028年3月31日

研究課題: 戦間期における探偵小説ジャンルと文学・芸術言説の編成に関する研究

*中西 麻一子

現 職：非常勤講師
研究期間：2025年4月1日～2028年3月31日
研究課題：南インド仏教の仏伝図と聖蹟図に関する
研究：カナガナハリ大塔に着目して

□解任（2025年3月31日付）

*大関 綾
*温 秋穎

*平田 公威

現 職：非常勤講師
研究期間：2025年4月1日～2028年3月31日
研究課題：ブーレーズ音楽論からみた20世紀後半
フランス思想研究

*脇中 洋

現 職：名誉教授
研究期間：2025年4月1日～2029年3月31日
研究課題：司法面接的聴取を検証可能にし、非言語
的表出を記録する試み

(2025年7月24日付)

*清水 洋平

現 職：非常勤講師
研究期間：2022年4月1日～2025年3月31日、繰
越による補助事業期間延長により2026年3月31日
まで
研究課題：タイ国で発展した積徳行文献に基づく蔵
外仏典の研究

(2025年7月31日付)

*亀山 裕樹

現 職：任期制助教
研究期間：2025年7月31日～2027年3月31日
研究課題：ヤングケアラーの直面する「生活のかか
ったケアの強制性」の解消に向けた基礎的検討

*下村 優佳

現 職：任期制助教
研究期間：2025年7月31日～2027年3月31日
研究課題：日本中世の地域社会における民衆の宗教
受容とその表現—真宗絵画に着目して—

*繆 寿楽

現 職：東京分室PD研究員
研究期間：2025年7月31日～2027年3月31日
研究課題：インド仏教認識論の研究—ダルモータ
ラに見る認識プロセスの革新



〈真宗総合研究所ホームページ〉

研 究 所 報 第 87 号

2026年3月1日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435

Email. kenkyusyo@sec.otani.ac.jp